

加茂市役所遺跡

－旧加茂市役所庁舎解体撤去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1995

新潟県加茂市教育委員会

加茂市役所遺跡

—旧加茂市役所庁舎解体撤去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995

新潟県加茂市教育委員会

序

加茂市は新潟県のはば中央に位置し、市街地には加茂川が流れ、緑に映える加茂山もあります。山紫水明の地として古くから北越の小京都と言われてきました。

加茂山山頂近くに青海神社があり、その周辺は青海神社遺跡として今までに、土師器、須恵器などの破片が数多く発見されました。

加茂市役所遺跡は、青海神社遺跡のある丘陵の裾と低地が接する地点に位置しています。昭和30年5月、市役所庁舎建築に際し、地下室部分を掘削中に縄文時代の土器片を発見しました。直に工事を中断して発掘調査を行い、約150点の土器片を採集しました。また、遺物包含層と同一地層からクルミなどの植物遺体も出土しました。

平成5年8月に市役所が移転しました。旧市役所庁舎の取り壊しをまって、平成6年3月に先回遺物が出土した地点周辺の発掘調査を行い、縄文時代中期・後期の遺物を僅かですが採集しました。本調査報告書は、先回出土した遺物を再整理し、今回出土した遺物とあわせて調査したものをまとめたものであります。

青海神社周辺一帯は加茂山公園として市民に親しまれています。その地に先人が住み、往時の生活用具の一部が出土したことは、市民に一層の親近感を懐かせ、遺跡への関心を高め、遺跡保護の重要性をより深めたものと考えます。

本遺跡の発掘調査にあたり、ご指導・ご支援を賜りました、県文化行政課並びにご協力・ご援助をいただきました関係各位に心より厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

加茂市教育委員会

教育長 伊藤 笠男

例　　言

1. 本書は新潟県加茂市松坂町268番地ほかに所在する加茂市役所遺跡の発掘調査報告書である。また、併せて昭和30年出土の資料についても再整理し、報告するものである。

2. 発掘調査は、旧加茂市役所庁舎解体撤去工事に伴い、加茂市教育委員会が主体となって、平成6年3月11日～3月14日に実施した。調査面積は約50m²であった。

3. 調査体制は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教　　育　　長	伊藤 笠男
総　括		社会教育課長	伊藤 武之（～平成6年3月） 田澤 弘一（平成6年4月～）
管　理		社会教育課係長	土田 孝次郎
庶　務		社会 教 育 課	番場 ヒデ・長谷川 健一（～平成6年3月） 五十嵐 卓（平成6年4月～）
		加茂市民俗資料館	桑原 厚三
調査担当		社会教育課主事	伊藤 秀和
発掘作業参加者		小柳 章一・管家 与三郎・外山 登	

4. 出土遺物は一括して加茂市教育委員会が保管し、その一部を加茂市民俗資料館で展示している。

5. 本書の編集・執筆は、伊藤 秀和がおこなった。ただし、第V章については、パリノ・サーヴェイ株式会社に資料を委託し、同社より玉稿を頂いた。

6. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は、真北から西偏約7°10'である。

7. 図版の空中写真は、(財)日本地図センター発行の米軍が昭和22年11月に撮影したものを使用した。
縮尺は約1/16,000である。

8. 第1図・第2図・第3図の写真は八百枝 茂氏が撮影したものである。

9. 本書に掲載した遺物は通し番号を付し、実測図と写真の番号は同一としている。

10. 遺物実測図・写真の縮尺は、第11図・図版6 42を2分の1、ほかすべては3分の1とした。

11. 遺物の拓本は、断面左側に外面を示したが、第11図43と45は、断面右側が外面、左側が内面を示している。

12. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。(敬称省略、五十音順)

青山 誠八・安藤 正美・石原 正敏・梅川 勝史・大橋 信彦・小田 由美子・金子 拓男
金子 正典・駒沢 悅郎・関 正平・関 雅之・高橋 保・竹田 和夫・田中 靖・田畠 弘
田村 浩司・寺崎 裕助・藤巻 正信・古川 信三・前山 精明・水澤 幸一・八百枝 茂
(株)小柳組・新潟県教育庁文化行政課・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業團

目 次

序

加茂市教育委員会教育長 伊藤 笹男

例 言

目 次

挿図目次 写真図版目次 表目次

第Ⅰ章 序 説	1
1. 加茂市役所遺跡の発見	1
2. 調査に至る経緯	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
3. 東山丘陵縁辺部における縄文時代の遺跡	6
第Ⅲ章 発掘調査の概要	8
1. 調査の方法	8
2. 調査の経過	8
3. 層 序	8
第Ⅳ章 遺 物	10
1. 縄文土器	10
2. 石 器	13
3. 土 師 器	13
4. 中世陶器	13
第Ⅴ章 自然科学分析 -縄文時代中期の植物遺体の同定-	14
1. はじめに	14
2. 樹種同定	14
3. 種実同定	15
4. 考 察	16
第VI章 ま と め	17
1. 第Ⅰ群土器（縄文中期前葉）について	17
2. 遺跡の性格について	17
引用・参考文献	19

挿図目次

第1図 地下室部分の土層断面写真（昭和30年）	1
第2図 地下室部分の遺物出土状況写真（昭和30年）	1
第3図 旧加茂市役所庁舎建設工事風景写真（昭和30年）	1
第4図 加茂市役所遺跡周辺の地形図（S = 1/10,000）	4
第5図 発掘調査区位置図（S = 1/2,500）	4
第6図 加茂市役所遺跡と周辺の遺跡分布図（S = 1/50,000）	5
第7図 東山丘陵縁辺部の縄文時代遺跡分布図（S = 1/100,000）	7
第8図 発掘調査区設定図（S = 1/400）	9
第9図 加茂市役所遺跡土層断面図（S = 1/50）	9
第10図 出土遺物実測図（S = 1/3）	11
第11図 出土遺物実測図（S = 1/2、S = 1/3）	12

写真図版目次

図版 1 加茂市役所遺跡周辺の空中写真（S = 約1/16,000）	
図版 2 1.遺跡近景（北東から） 2.遺跡近景（北から） 3.遺跡近景（南東から）	
図版 3 1.発掘調査風景 2.発掘調査風景 3.発掘調査風景	
図版 4 1.調査区北壁土層断面（南から） 2.調査区北壁土層断面（南から） 3.調査区西壁土層断面（東から）	
図版 5 1.自然木No.1出土状況（西から） 2.自然木No.2出土状況（東から） 3.調査区完掘状況（西から）	
図版 6 出土遺物（S = 1/2、S = 1/3）	
図版 7 木材・炭化材	
図版 8 炭化材	
図版 9 種実	

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	5
第2表 東山丘陵縁辺部の縄文時代遺跡一覧表	7
第3表 樹種同定結果	15

第Ⅰ章 序 説

1. 加茂市役所遺跡の発見

本遺跡は、昭和30年に旧加茂市役所庁舎地下室建築の際に、地表下約4mの地層から縄文土器片が出土したことにより所在が明らかになった。このように深く、湿地状のところから縄文土器が出土することは全く予想できない事態であり、当時は稀有の遺跡として認識されることになった。

当時、加茂市教育委員会（以下、市教委）は、長岡市立博物館勤務の中村孝三郎氏に来跡願い、指導を仰ぐとともに、加茂市在住の八百枝茂氏（前加茂市文化財調査審議会委員長）を中心となって、工事の合間に遺物の収集を行った。工事中の不時発見ということもあり、遺物の収集にとどまり、遺構などの確認は不可能であった。収集された遺物は、縄文土器約150点、石鏃1点、土師器1点、中世陶器2点、炭化材数点、植物遺体多量などであった。

それらの成果については、中村孝三郎氏ほかが、「嵐北」（新潟県教育委員会1972）に土器を紹介され、八百枝茂氏が『加茂市史』上巻（加茂市1975）に詳述されている。両書によって、縄文土器の年代が、縄文中期前葉～中葉、後期に比定されることが明らかになった。また、後書によって、市役所遺跡地層図が図示され、遺物包含層の位置と堆積状況が明らかにされた。それらは、今後の発掘調査の指針となるものであり、両者の業績に対し深く敬意を表するものである。



第1図 地下室部分の土層断面写真（昭和30年）



第2図 地下室部分の遺物出土状況写真（昭和30年）



第3図 旧加茂市役所庁舎建設工事風景写真（昭和30年）

2. 調査に至る経緯

昭和31年に、旧加茂市役所庁舎（以下、旧市役所庁舎）は完成し、平成5年8月半ば過ぎまで、行政事務がとり行われた。また、出土した遺物は、加茂市民俗資料館に収蔵され、一部が展示された。

平成5年8月、旧市役所庁舎の老朽化と行政事務の増大、駅前地区土地区画整理事業の整備などから、市役所の移転が計画、実行された。新加茂市役所庁舎は西加茂地区に完成し、旧市役所庁舎は取り壊し、社会教育施設を建設するという方針が示された。この旧市役所庁舎解体撤去工事に伴い、遺跡の取り扱いが問題になった。

このような状況の中、旧市役所庁舎北側前面にて歩道と水路築造工事が実施されるに及び、文化財保護法第57条の3第1項に基づく通知が必要か否かで問題がおきた。市教委は1月18日、県文化行政課主任の高橋氏に現地視察を願い、埋蔵文化財包蔵地の捉え方や庁内連絡体制の不備、文化財保護法第57条の3第1項に基づく通知提出が必要の旨指導を受けた。

市教委は、これを受けて、再度関係各課に、文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知提出を依頼した。

加茂市は、平成6年2月17日付けで歩道と水路築造工事・旧市役所庁舎解体工事に関し、それぞれ文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官に行った。

その後、市教委は、関係各課と協議を重ね、地下室解体部分は、立ち会い調査、地下室北側の一部分については、発掘調査を行うこととした。歩道と水路築造工事部分については、掘削が進み、調査不可能であることから、断念せざるを得なかった。

また、調査方法、調査期間などについて、関係各課と協議を行い、重機は解体撤去工事のため搬入されていたものを借用すること、発掘調査区が市街地に隣接していることや加茂祭り前までに駐車場として利用する計画などが考慮され、急きょ平成6年3月11日から5日間の予定で本発掘調査が実施されるはこびになつた。市教委は、平成6年3月2日付けで文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官に行い、発掘調査の準備に入った。

発掘調査終了後、旧市役所庁舎西側部分で道路工事が施工されるに及び、市教委は周知の遺跡の隣接区域であることから、関係課に文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知の提出を依頼した。そして、加茂市は文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を平成6年9月9日付けで文化庁長官あて送付を行った。その後、市教委は工事方法、工事の進捗状況などを考慮し調査員の立ち会い調査で対応することにした。しかし、遺構・遺物は検出されなかつた。

以上が本遺跡を巡っての経緯であるが、周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接する区域で開発行為を行う場合に、埋蔵文化財発掘の通知が必要とされることについて、開発側と翻訳をいたし、対応が遅れることになった。今回の事例を踏まえ、埋蔵文化財の特質と遺跡の範囲の考え方などについて、事前協議を密に行い、埋蔵文化財保護に遺漏のないようにしなければならない。

なお、現在旧市役所跡地は、加茂山公園を訪れる方々の交通事情に供する駐車場として活用されている。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境（第4・5図、図版1・2）

加茂市役所遺跡は、新潟県加茂市松坂町268番地ほかに所在する。加茂市は、新潟県のほぼ中央部に位置し、隣接する三条市、南蒲田上町などとともに県央地域と呼称されている。新潟市から南約30kmの地点に位置する。市域は東西に細長い形状を呈し、粟ヶ岳(1,293m)に源を発する加茂川が市域を北西流し、加茂新田で信濃川に注いでいる。この加茂川は七谷地区で段丘を形成し、支流の河川沿いと合わせ、原始時代の遺跡を多く生み出している。加茂川は多くの豊饒と水害等の苦難の歴史を併せ持ち、加茂市を成長・発展させてきた川である。この加茂川にかかる橋や、京都の賀茂神社、賀茂川などに由来し、加茂市は『北越の小京都』と呼ばれている。

加茂市役所遺跡は、延喜式内社として著名な青海神社が鎮座し、東山丘陵の一角を占める加茂山から北西部方向に、約15°の緩傾斜で張り出した丘陵端部が低地に没する地点に位置している。現地表面の標高は約13mで、青海神社境内地との比高は約27mを測る。また、本地点は、加茂川が山間地を抜けて平野部に注ぐ開口部左岸付近で、加茂山にくいこむ谷（俗称兎谷、現在は神池がある）口沿いにも位置し、湿潤地に近接していたと考えられる。

2. 歴史的環境（第6図）

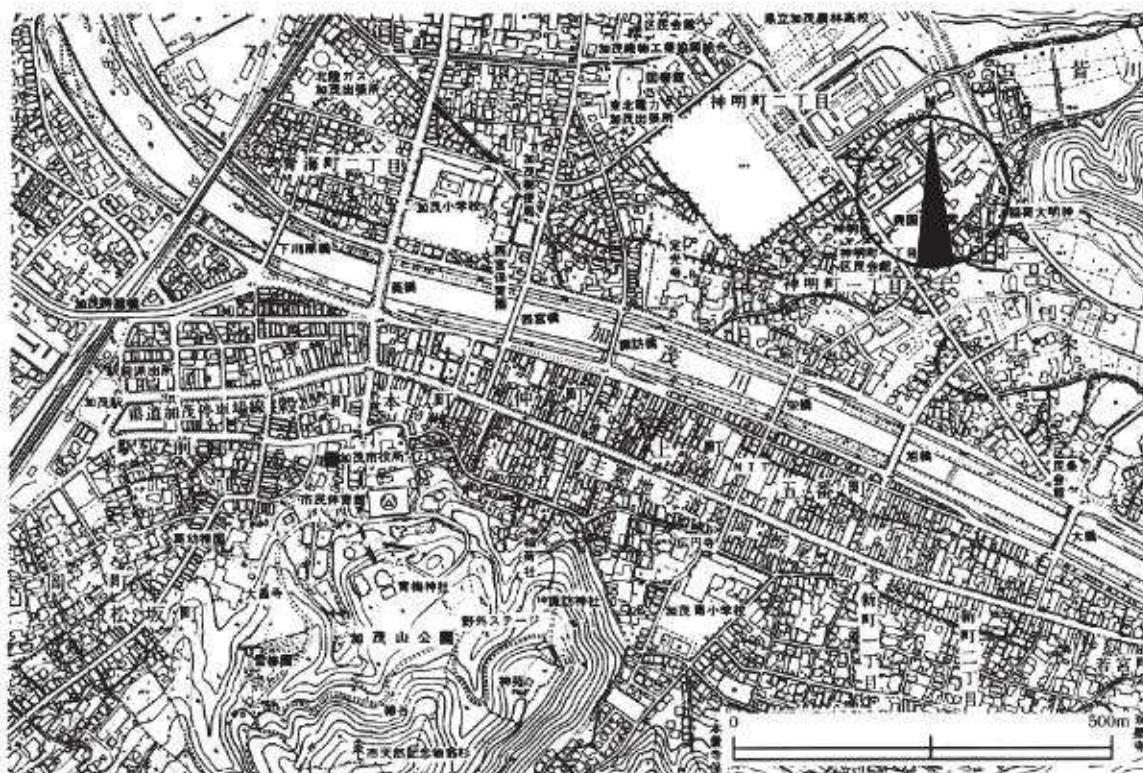
加茂市内の遺跡は、現在約110箇所確認され、その大半は、七谷地区に所在している。加茂市役所遺跡は、加茂地区に所在し、加茂山の眼下に位置する。加茂山周辺は歴史的には、古代～中世の遺跡が多く確認され、現在も加茂市のシンボルとして、市民憩いの場として整備され、多くの方々に利用されている。以下、加茂山周辺の遺跡について年代順に概観してみたい。

旧石器時代と縄文時代の遺跡は、七谷地区の加茂川とその支流によって形成された段丘上に集中する。加茂山周辺では、遊覧場遺跡（8）と加茂市役所遺跡から南西約2kmに所在する花立遺跡（14）があるにすぎない。前者は、遺跡登録されてはいるが、遺物の所在なども不明で、後者もごく僅少な土器片の採集にとどまり、詳細は不明となっている。

弥生時代の遺跡は、加茂市内では、未発見である。古墳時代になると、沖積地への進出が進み、石川遺跡（1）、釜湊遺跡（2）、千刈遺跡（3）などが確認されている。千刈遺跡は、河川改修の際、多量の古墳時代後期の土師器が採集されている。釜湊遺跡は、今年度、発掘調査が行われ、古墳時代前期・後期の土師器が大量に検出された。また、石川遺跡でも古墳時代前期の線刻付き埴形土器が採集されており、興味深い資料である。このように、加茂川下流域の両岸に古墳期の遺跡が展開している。古墳も下条川を挟んで南方の丘陵上に確認されている（15・16）。

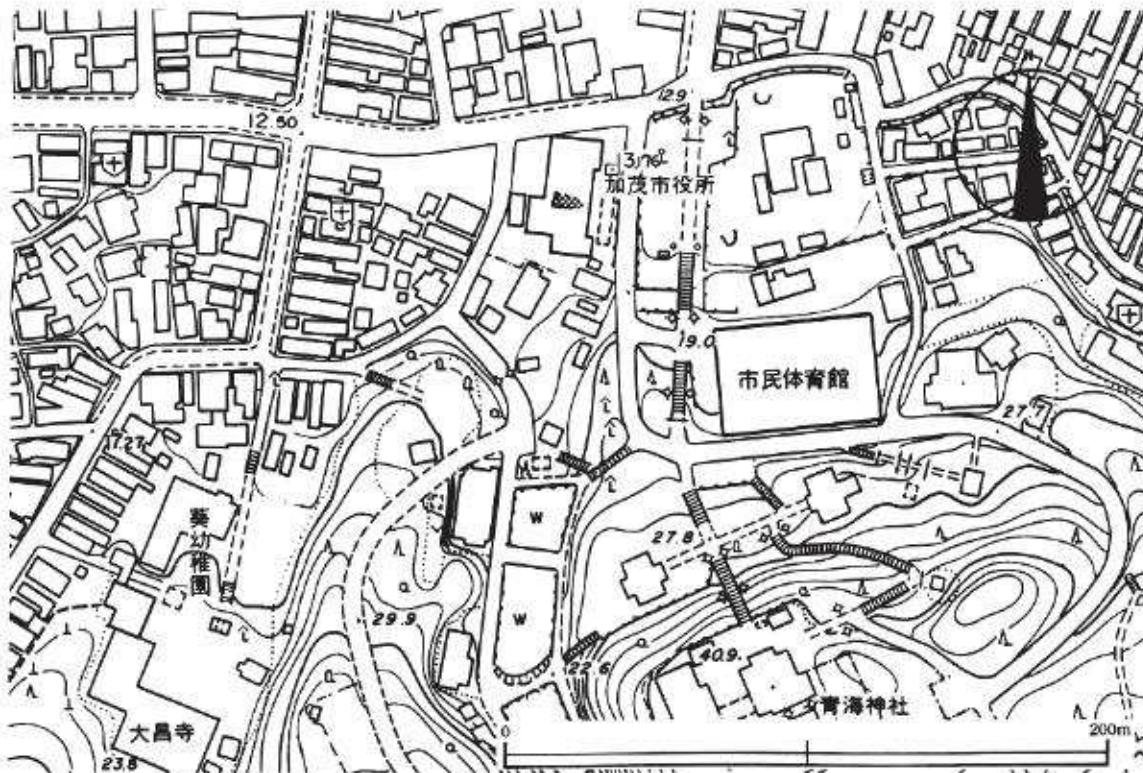
古代・中世では、青海神社境内地一帯に展開する青海神社遺跡（7）から須恵器・中世陶器が採集されているが、古代の遺物は概して少ない。青海神社は延喜式内社に比定されることや「青海」の地名などから、本地域は古代蒲原郡青海郷の中心地と想定されているが、現段階では考古学からそれに答えられる状況ではない。また、青海神社境内に存在した経塚から、治承2年（1178）の銘をもつ銅製経筒などが出土し県指定文化財となっている。さらに、加茂山および周辺には約1万3千枚の古銭が吉岡編年Ⅱ期（吉岡1989）の所産と思われる珠洲焼壺に入って発見された加茂の古銭出土地（5）や宮山貴船神社遺跡（6）、元龜元年（1570）に上杉氏の家臣早部基甫守が築城したとされる加茂山要害城砦跡（11）、剣ヶ峯城跡（12）、城山砦跡（13）が存在し、古代～中世期において重要な場所であったことが理解される。

2. 歴史的環境



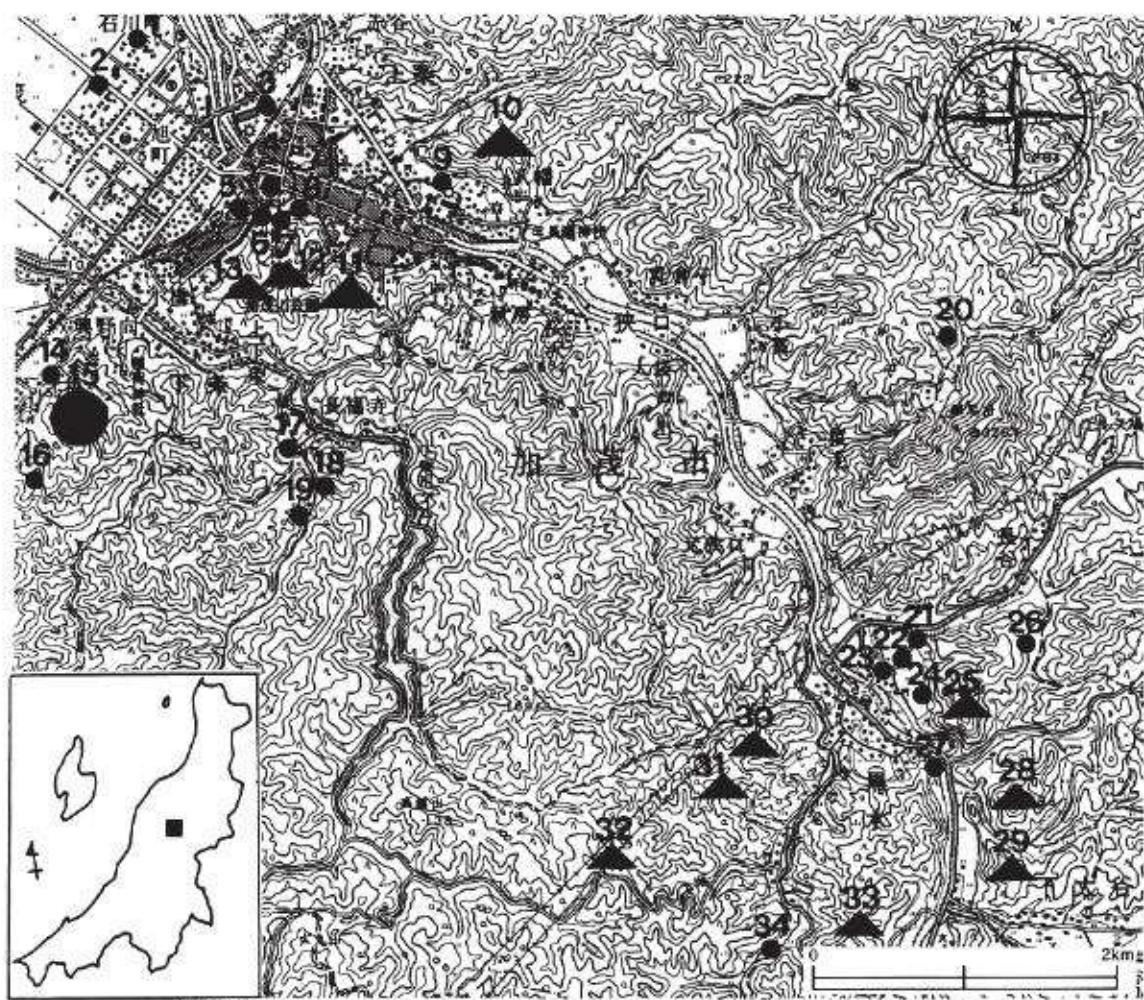
第4図 加茂市役所遺跡周辺の地形図 ($S = 1/10,000$)

加茂市作成 加茂市街図 1:10,000 平成4年2月 編纂



第5図 発掘調査区位置図 ($S = 1/2,500$)

加茂市作成 加茂市街図 1:2,500 平成2年2月 発行



第6図 加茂市役所遺跡と周辺の遺跡分布図 (S = 1/50,000)

国土地理院発行地形図「加茂」1:50,000 平成2年

第1表 周辺の遺跡一覧表 (No.は第6図に対応)

No.	遺 跡 名	種 別	時 期	No.	遺 跡 名	種 別	時 期
1	石川遺跡	遺物包含地	古墳・古代・中世	18	長福寺跡	寺院址	中世・近世
2	釜測遺跡	"	古墳・古代・中世	19	天徳寺遺跡	遺物包含地	中世
3	千刈遺跡	"	古墳・中世	20	猿ヶ山遺跡	"	縄文前・後期
4	加茂市役所遺跡	"	縄文中・後・中世	21	岩野原D遺跡	"	縄文
5	加茂の古錢出土地		中世	22	岩野原A遺跡	"	縄文中期
6	宮山貴船神社遺跡	遺物包含地	古代・中世	23	岩野原C遺跡	"	縄文後・晚期
7	青海神社遺跡	"	古代・中世	24	岩野原B遺跡	"	旧石器・縄文中期
8	遊覧場遺跡	"	縄文晚期?	25	薬師山城址	山城	中世
9	上條館跡	館跡	中世	26	松ヶ沢遺跡	遺物包含地	縄文中期
10	上條要害	山城	中世	27	七谷忠魂碑遺跡	祭祀跡	縄文中・後期
11	加茂山要害城砦跡	"	中世	28	石高山城址	山城	中世
12	剣ヶ峯城跡	"	中世	29	石山城址	"	中世
13	城山砦跡	"	中世	30	西ヶ峯堅柵	"	中世
14	花立遺跡	遺物包含地	縄文中・古代	31	西ヶ峯砦跡	"	中世
15	福島古墳群	古墳	古墳	32	西ヶ峯城址	"	中世
16	宮の浦古墳	"	古墳	33	下大谷城址	"	中世
17	天神口遺跡	遺物包含地	古代・中世	34	上黒水遺跡	遺物包含地	縄文

3. 東山丘陵縁辺部における縄文時代の遺跡（第7図）

ここでは、行政区画として、新津市・五泉市・小須戸町・田上町・村松町・加茂市・三条市・栄町・見附市の各一部地区を包括し、新潟平野東縁部にあたる東山丘陵西側縁辺部と東側縁辺部に所在する縄文時代の遺跡分布状況についてふれてみたい。該区域に立地する遺跡は信濃川・早出川・加茂川・五十嵐川・刈谷田川などの河川によって区切られ、そのほとんどが丘陵縁辺に展開する台地に立地する。本区域は近年、寺崎氏が縄文中期を中心とした拠点的集落跡の抽出から地域ブロックの存在を示したなかの、本遺跡が位置するブロック（D）新津・村松丘陵域を中心とし、（E）栃尾・下田丘陵域、（F）信濃川右岸中流域の一部を含んだ地域に相当する（寺崎 1994）。第7図には、寺崎氏が抽出した拠点的集落跡だけではなく遺物散布地ほかも記入しており、発掘調査事例（該区域内では大小規模問わず18遺跡）が少なく詳細不明の遺跡が多いこと、分布調査などの粗密差があることなどをあわせ考えると、必ずしも意味のある分布を把握できる段階ではないと思われるが、以下この分布図から読み取れる事項を現状認識、今後の視点とすべく述べてみたい。

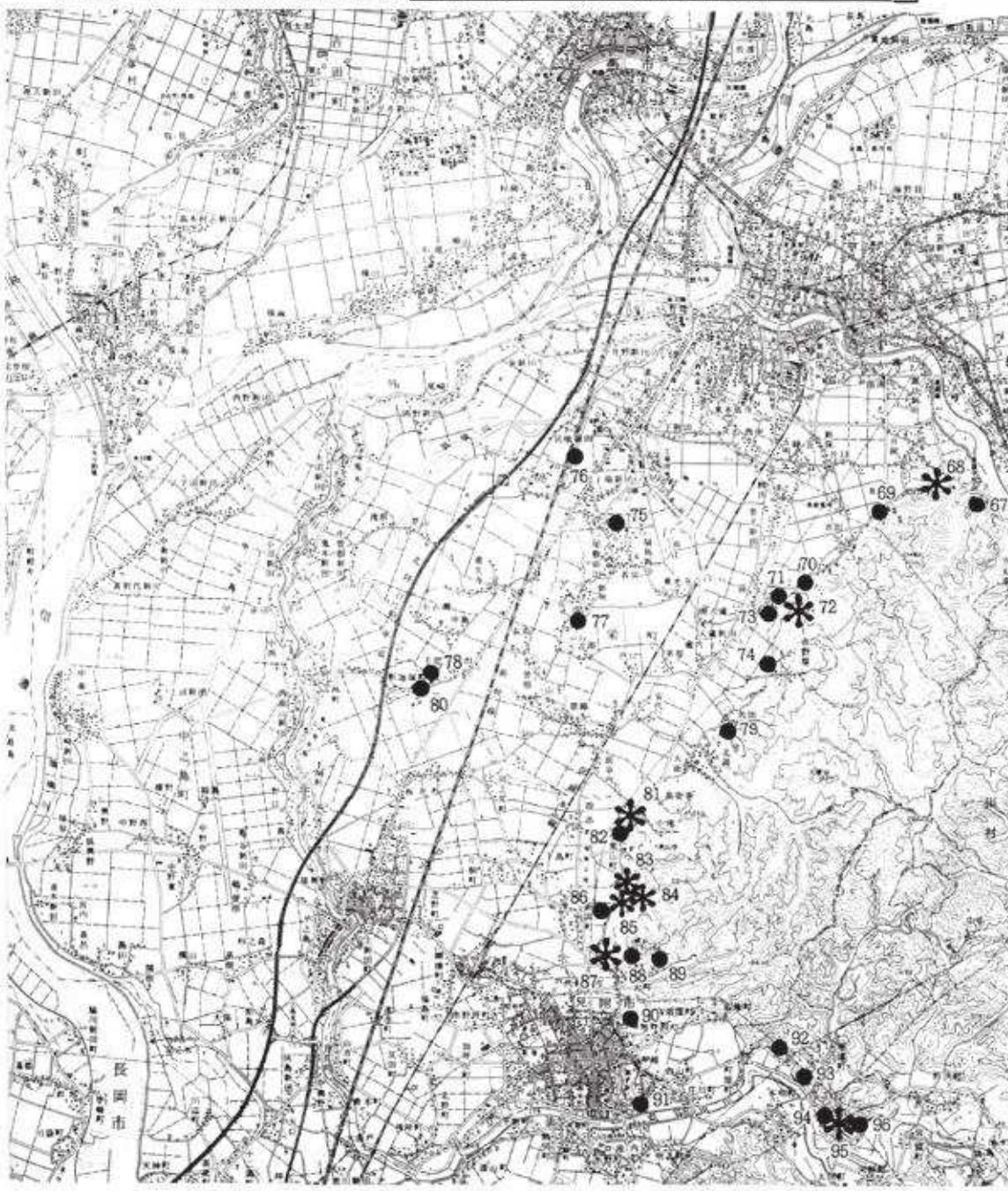
本区域において現在確認できる縄文時代遺跡総数は96である。時代別遺跡数は、前期10・中期41・後期44・晩期21・時期不明（各文献に縄文、石器などと記載されているものなど）28である。本区域における縄文時代の遺跡の形成は前期に遡り、散発的に土器が出土している。草水町2丁目窯跡（6）・古屋敷（30）・安出（53）・綾ノ前（68）・吉野屋（72）・山崎A（78）・弥彌田遺跡（79）などで発掘調査が行われ、前期の土器が出土しているが、該期の明確な遺構は検出されていないようである。中・後期になると遺跡数が急増し、該期の活発な活動が窺える。概して、中期のみの遺跡は少なく、複数時期にわたる遺跡が多い。2時期以上34遺跡、3時期以上12遺跡である（前期からも含む）。3時期以上にわたる遺跡として、赤坂（21）・川船河（38）・牧（44）・閑屋敷（48）・安出（53）・綾ノ前（68）・吉野屋（72）・山崎A（81）・ガクラ（83）・黒坂（84）・前山（85）・塔ヶ峰（95）が挙げられる。これに、居住遺構が検出されていること、多量の遺物・特殊遺物が検出されていること、寺崎氏が拠点的集落跡と推定されている遺跡などから、原（7）・平（11）・古屋敷（30）・塚野（33）・保明浦（36）・下戸倉（51）・矢津（58）・上野原（65）・羽黒（87）を抽出し加算すると合計21遺跡が数えられる。これらの遺跡をある一定範囲内における中心的遺跡とすることが許されるならば、小須戸町、加茂～三条市の一部地域に空白域を残し、それを核に遺跡の集中する地点が認められ、有機的な関係が想起される。特に、五十嵐川と刈谷田川に挟まれた区域では綾ノ前遺跡（68）を起点として、3～5km間隔で中心的な遺跡が存在することが指摘できる。村松町域では2～4km間隔で中心的な遺跡が存在しているが、明確な形で遺跡群は形成しない。しかし、この遺跡群として認識された中には、一つの遺跡として括られるもの、遺跡の時期差などから、視覚的に把握されたに過ぎないものもあり、今後の検討課題を多く含んでいる。

また、本県では、縄文後・晩期になると気候の寒冷化による環境変化とそれに伴う生業活動の変化などから低地部へ遺跡の進出が見られる（中島 1986）が、本区域でも同様の状況を看取することができる。栄町長畑遺跡（76）や近年では、田上町保明浦遺跡（36）、栄町壇面遺跡（78）などが発掘調査され、前者では墓壙と推測される遺構から多量の縄文晩期の土器などが出土し（田畑 1993）、後者では溝状遺構から縄文後期の土器が検出され（安藤正美・大橋信彦氏教示）、居住を意識した形態での遺跡の進出が想定される。これらの遺跡は丘陵縁辺部から約1～4km程離れた沖積地上に位置している。後・晩期のみならず、小須戸町横川浜堤外地遺跡（25）では、信濃川流域沿いの自然堤防上と推測されるところから縄文中期土器が採集されており、沖積地での縄文期の遺跡の在り方に注意する必要がある。

以上、雑駁であるが該地域の縄文時代遺跡分布状況をかいま見た。しかし、遺跡の詳細な時期比定や地形分類、加茂川、五十嵐川とその支流域沿いの遺跡との関係など、検討すべき課題は多い。

第2表 東山丘陵縁辺部の縄文時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	時期	備考	No.	遺跡名	時期	備考
1	小手	縄文後期前葉	縄文土器・磨石	49	阿弥	縄文	石器
2	平葉	縄文後期前葉	縄文土器	50	寺戸	縄文晚期	石器・凹石・磨製石斧
3	秋葉	縄文中期前葉	縄文土器	51	下茨	縄文中・後期	石棒・土偶
4	ブドー	縄文後期?	縄文土器・石斧・磨石	52	茨	縄文中期?	石棒
5	山城	縄文?	縄文土器	53	坂	縄文前~晚期	石器・土鍤・石鍤
6	見草	縄文前・中期	石製釣り針・石鍤	54	中水	縄文後・晚期	石器・磨製石斧
7	草木	縄文前・中期	石棒・土偶・石鍤	55	矢	縄文中・後期	石器・磨製石斧
8	水町	縄文中・後期	磨製石斧	56	水	縄文	石器
9	原善	縄文?	石器	57	旭	縄文後・晚期	石器・石棒・土偶
10	衛門	縄文後期?	石棒	58	矢	縄文中・後期	植物遺体・石器
11	平居	縄文後期?	石核・石斧	59	加瀬	縄文晚期?	凹石
12	平百	縄文中・後期	住居址2・土坑1ほか	60	花	縄文中期?	縄文土器
13	高刈	縄文	磨製石斧	61	諏訪	縄文後期?	石器
14	地A	縄文中・後期	石鍤?	62	諏訪	縄文後期?	石器
15	地B	縄文	縄文土器	63	諏訪	縄文後期?	石器
16	埋葬	縄文中・後期	石器・磨製石斧	64	上嶺	縄文後期	住居址1・炉址1
17	鳥島	縄文?	石器	65	大山	縄文中期	縄文土器
18	神坪	縄文	磨製石斧	66	道綾	縄文晚期	土坑11
19	坪下	縄文後期	磨製石斧・石鍤	67	山心	縄文前~晚期	縄文土器
20	赤八宮	縄文前~後期	石器・凹石	68	ノ吉	縄文中期	縄文土器
21	橋手	縄文後期	石器・磨製石斧	69	孤	縄文中期	縄文土器
22	橋手	縄文中期	石器	70	新吉	縄文前~後期	土偶・土製品・其筋
23	古川	縄文前期前半	石器・石鍤・土製品	71	白	縄文後期	磨製石斧
24	川堤	縄文中期	縄文土器	72	白	縄文	?
25	外社	縄文後期	縄文土器	73	上福	縄文後期	溝状遺構
26	社屋	縄文	石器	74	長	縄文後期	縄文土器
27	屋	縄文	遺構未検出	75	新	縄文中期	縄文土器
28	波	縄文前・中期	石器	76	新堀	縄文後期	石器・石棒・土鍤
29	三古	縄文	石器	77	矢	縄文?	縄文?
30	新下塚	縄文	石器	78	細	縄文後・晚期	溝状遺構
31	塚野	縄文	石器	79	吉	縄文後期	縄文土器
32	敷川	縄文	硬玉製勾玉	80	細	縄文中期	縄文土器
33	敷川	縄文後期	石器・凹石・ビッヂ塊	81	吉	縄文前~後期	埋没谷・砥石・垂飾
34	野の	縄文後期	石器・凹石・ビッヂ塊	82	外ガ	縄文中期~晩期	ビット
35	明	縄文	石棒・土偶・独鉛石	83	黒	縄文中期~晩期	縄文土器
36	保川	縄文晚期	土偶・土箭・土鍤	84	前天	縄文前~後期	石器・石斧
37	道川	縄文	縄文土器	85	羽	縄文後期	縄文土器
38	河原	縄文中~晚期	土偶・土箭・土鍤	86	羽	縄文中・後期	縄文土器
39	崎	縄文中期	縄文土器	87	元	縄文中期	縄文土器
40	大羽	縄文後期	縄文土器	88	大智	縄文中期	縄文土器
41	大力	縄文	土偶	89	元	縄文中期	縄文土器
42	羽	縄文	石器	90	大智	縄文中期	縄文土器
43	山	縄文中期~後期	石器	91	堀	縄文中期~後期	縄文土器
44	場	縄文	磨製石斧・磨石	92	堀西	縄文中期~後期	縄文土器
45	牧	縄文	石器	93	カタ	縄文中期~後期	縄文土器
46	林	縄文晚期?	石棒・石器・独鉛石	94	カタ	縄文中期~後期	土偶・耳飾
47	野保	縄文中~後期	磨製石斧・磨石	95	久屋	縄文中期~後期	縄文土器
48	敷	縄文中~後期	磨製石斧・独鉛石	96	シケ番	縄文中期~後期	縄文土器



第7図 東山丘陵縁辺部の縄文時代遺跡分布図 (S = 1/100,000)

国土地理院発行地形図「新津」平成3年・「加茂」平成2年・「三条」平成元年

1 : 50,000を合成縮少

- 遺物散布地ほか
- * 中心的遺跡

第Ⅲ章 発掘調査の概要

1. 調査の方法（第8図）

調査区はあらかじめ設定されており、地表面下約1m程すでに掘削されていた状態であったため、「加茂市史」上巻（加茂市1975）の地層図を基に、縄文土器が出土したとされる遺物包含層まで重機（0.4 m³のバックホー）を使い、掘り下げた。その後は、人力により遺構・遺物の確認を行った。しかし、明確な形で土器が出土せず、湧水が激しいこともあり遺構・遺物ともに検出できなかった。そのため、グリッド杭の設定はせず、層序の確認にとどまった。実測は（株）小柳組に依頼し、調査区範囲と自然木の出土位置のみ行った。

2. 調査の経過

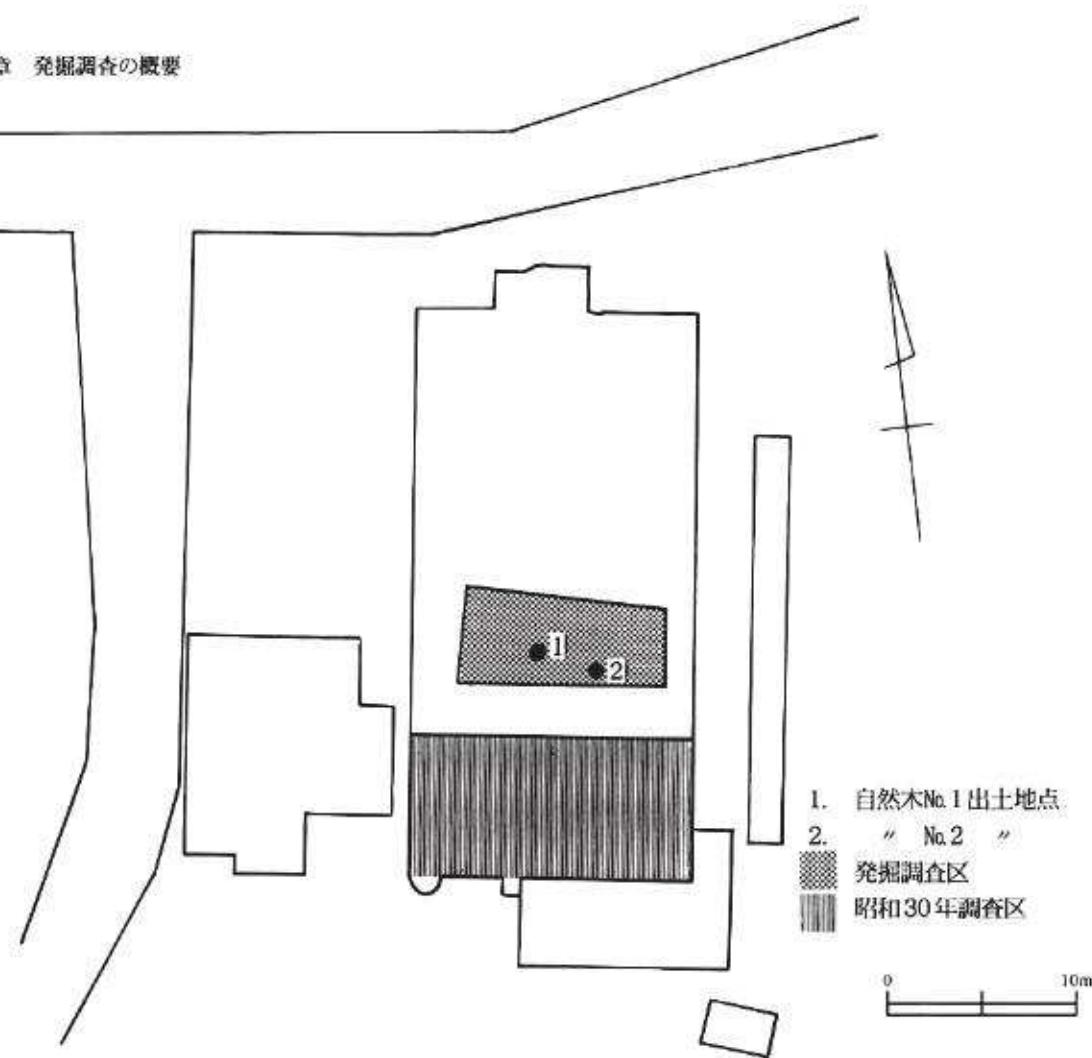
- 2月7日（月） 地下室解体部分の立ち会い調査。縄文土器片・植物遺体少量を検出する。三条市下保内在住の青山誠八氏にご協力頂く。
 発掘調査は4日間、延べ人数11名で、調査面積は約50 m²であった。
- 3月11日（金） バックホーにより、堆積土の除去を行い、遺物包含層の確認に努める。北壁上部から、土師器の細片を検出し、平安期以降の遺物包含が期待されたが、すでに上部は掘削されており、確認できなかった。八百枝茂氏来跡。
- 3月12日（土） バックホーにより、堆積土の除去を行い、遺物包含層の確認に努める。暗黒色土（XII層）中から縄文土器片が検出される。また、自然木2点を検出する。北壁精査。八百枝茂、関正平氏来跡。
- 3月13日（日） 北壁精査・写真撮影を行う。八百枝茂氏来跡。
- 3月14日（月） 完掘写真撮影、調査区位置図と自然木出土地点の記録を行う。午後に、急の為深掘りを行ったところ、さらに下層の暗黒色土（X層）から、縄文土器片が数点検出されたため、調査区全域にわたり、掘削したが、遺構・遺物は検出されなかった。発掘調査終了とし、器材の撤収を行う。

3. 層序（第9図、図版4）

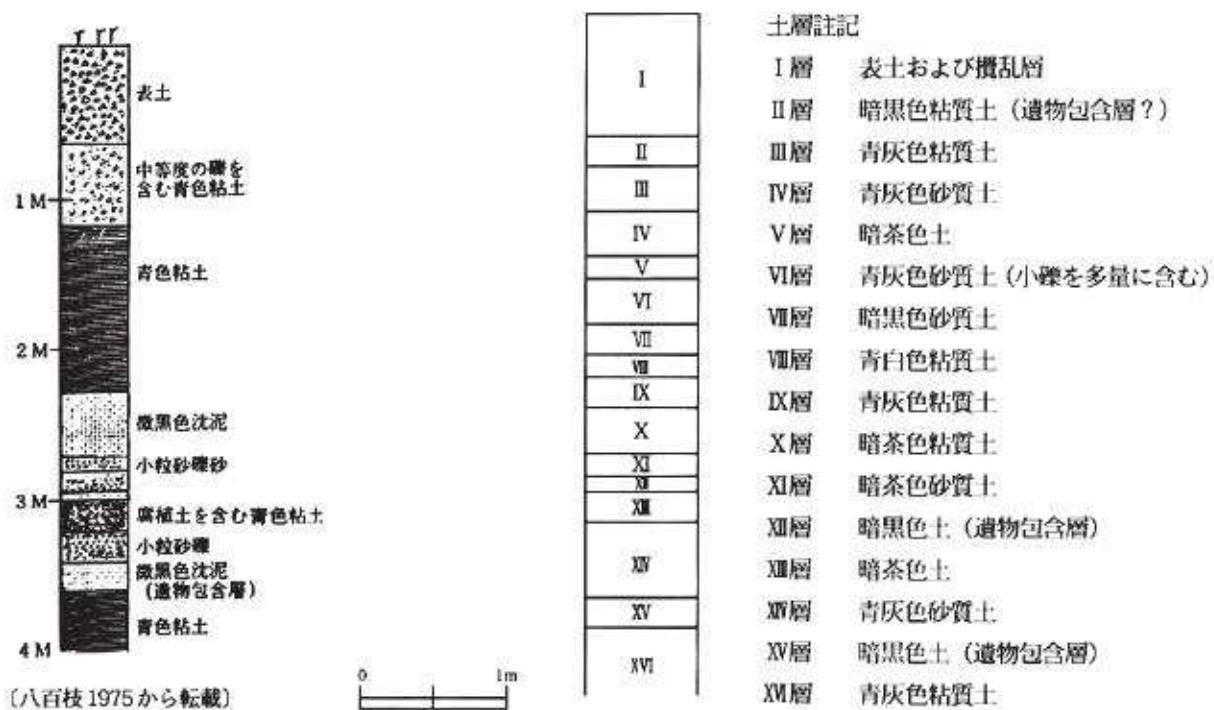
本調査区は、調査以前に約1m程、掘削されており、現地表面からの正確な土層堆積状況は確認できなかった。I層の表土層は、周囲との比高差や「加茂市史」上巻（加茂市1975）を参考にし、図示した。市史記載の地層図とは相違点もあるが、おおむね遺物包含層は対応する。また、今回の調査では、II層から土師器の細片が検出され、昭和30年にも土師器や中世陶器が採集されていることから、II層に古代以降の遺物包含層及び遺構が存在した可能性も考えられたが、明らかにしえなかった。

縄文時代の遺物包含層は、暗黒色を呈し、間層を挟み2枚確認できた。上部包含層（XII層）が地表下約3m、標高約9.5m、下部包含層（X層）が地表下約4m、標高約8.5mに相当する。しかし、今回の調査では、上下包含層の時期を明確にする状況での遺物の出土は見られなかった。III層～XI層にかけては、加茂川の度重なる氾濫の結果であろうか、青灰色と暗茶色の粘質土と砂質土が互層状を呈して堆積している。

なお、土層断面図のI～XII層までは、調査区北壁、XIII～XVI層については調査区西壁から作成し、合成した。



第8図 発掘調査区設定図 (S = 1/400)



第9図 加茂市役所遺跡土層断面図 (S = 1/50)

第IV章 遺 物

今回の発掘調査において出土した遺物はごく僅か（約20点）であり、図示し得たものは第11図36・37のみであった。ゆえに、ここで掲載する遺物のほとんどが、昭和30年に地下室部分から出土したものであり、再整理・再検討の意味も込め、報告するものである。

なお、その遺物については先に述べたように、『嵐北』（新潟県教育委員会1972）・『加茂市史』上巻（加茂市1975）にて、写真で紹介されている。^{註(1)}

また、今回検出された自然木の樹種同定にあわせ、昭和30年出土の炭化材、植物遺体などについても自然科学分析を依頼し、一緒に報告する（第V章）。

以下、昭和30年出土資料と平成6年発掘資料とを分離せず、一括して種別ごとに報告する。

1. 縄文土器（第10・11図33～41、図版6）

器種はほとんどが深鉢形土器で、1点のみ浅鉢形土器が認められる。しかし、すべて破片資料であるため、全体の器形を窺えるものはない。部位と文様を中心に分類を試み、時期別に述べる。

第I群（第10図1～32・図版6） 本群は縄文中期前葉に属するものである。

1類（1～14） 口縁部資料を本類とした。

1-a類（1） 横走する平行沈線間（幅約1.5cm）にヘラ状工具で、縦位集合沈線文（1cm間で3沈線）が描かれる。ゆるいくの字状を呈する頸部から直立ぎみに口縁部は立ち上がる。また、頸部には無文帯を有する。黒褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。口縁部内面に二次焼成を受けている。

1-b類（2、3） 連続爪形文を持つという点では、以下のg類まで共通するが、施文の位置、口縁部形態などから細分類した。本類は口唇部に連続爪形文を施し、その下部は縄文地（LR縄文）上に横走する半隆起線文を描く類である。2はやや内湾ぎみの口縁部で、口径は31.4cmを測る。磨滅のため、爪形文と縄文地ははっきりとしない。焼成良好で浅黄橙色を呈する。3はやや外反ぎみに立ち上がる口縁部である。焼成不良で暗褐色を呈する。

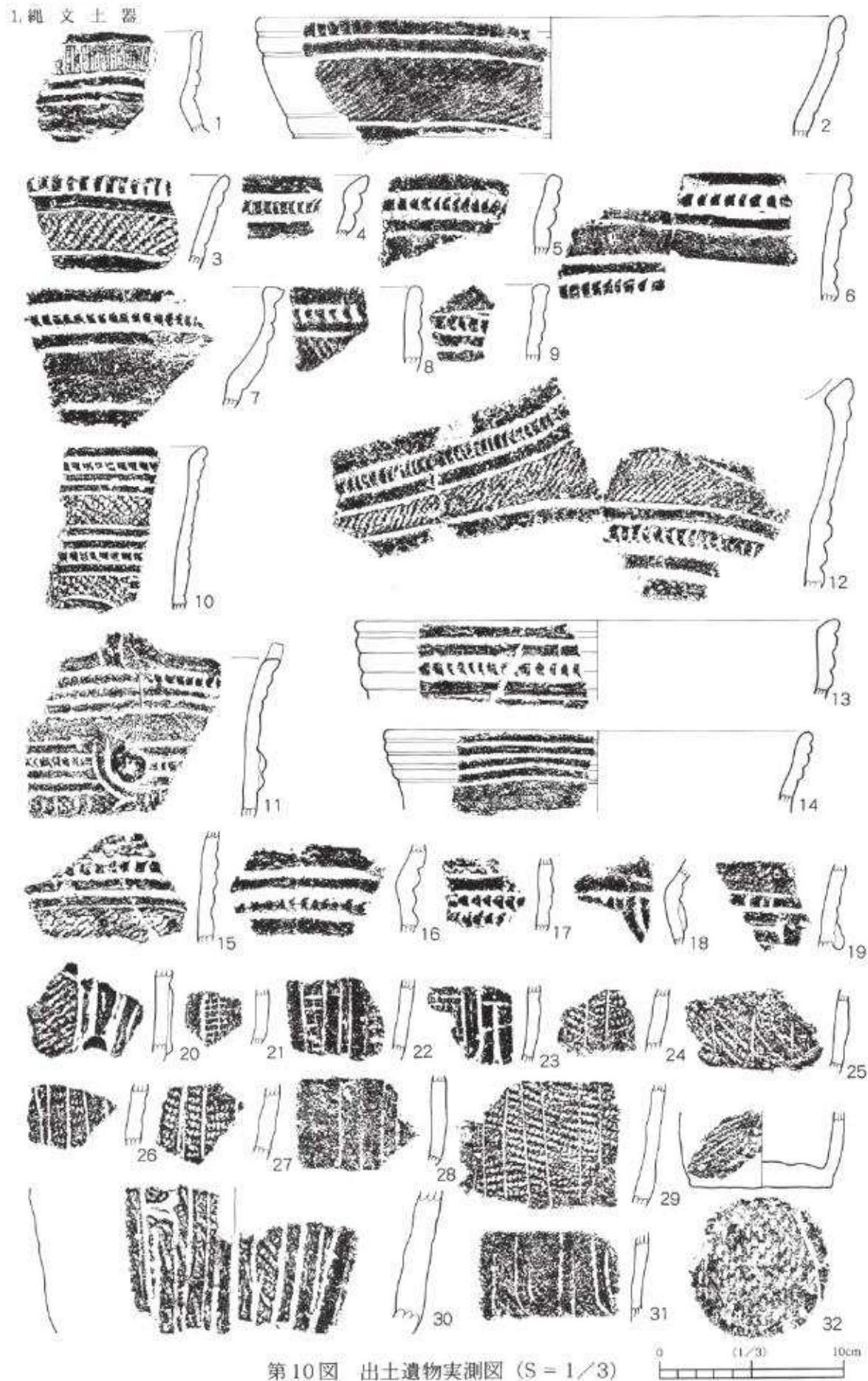
1-c類（4～7） 口唇部直下に連続爪形文を施し、口縁部に無文帯を持つ口縁部～頸部資料を本類とした。5と6は胎土、文様などから同一個体と考えられる。4・5・6はゆるく外反し、7はキャリバー状を呈する口縁である。口縁端部の形態は、折り返し状のもの4、丸くおさめるもの5・6、ほぼ水平にするもの7、に細分される。6と7において、無文帯下部にも半隆起線文、連続爪形文が見られる。4は、連続爪形文の施文深度が他に比べ浅い。また、4は黒褐色を呈し、胎土に金雲母を多量に含む。5・6は胎土に砂粒が目立つ。

1-d類（8） 直立ぎみの口縁部でモチーフはc類に類似するが、縄文地を残す。磨滅が著しいため、半隆起線文などははっきりしない。浅黄橙色を呈する。

1-e類（9） 口唇部に小突起を有し、直下に連続爪形文を施している。

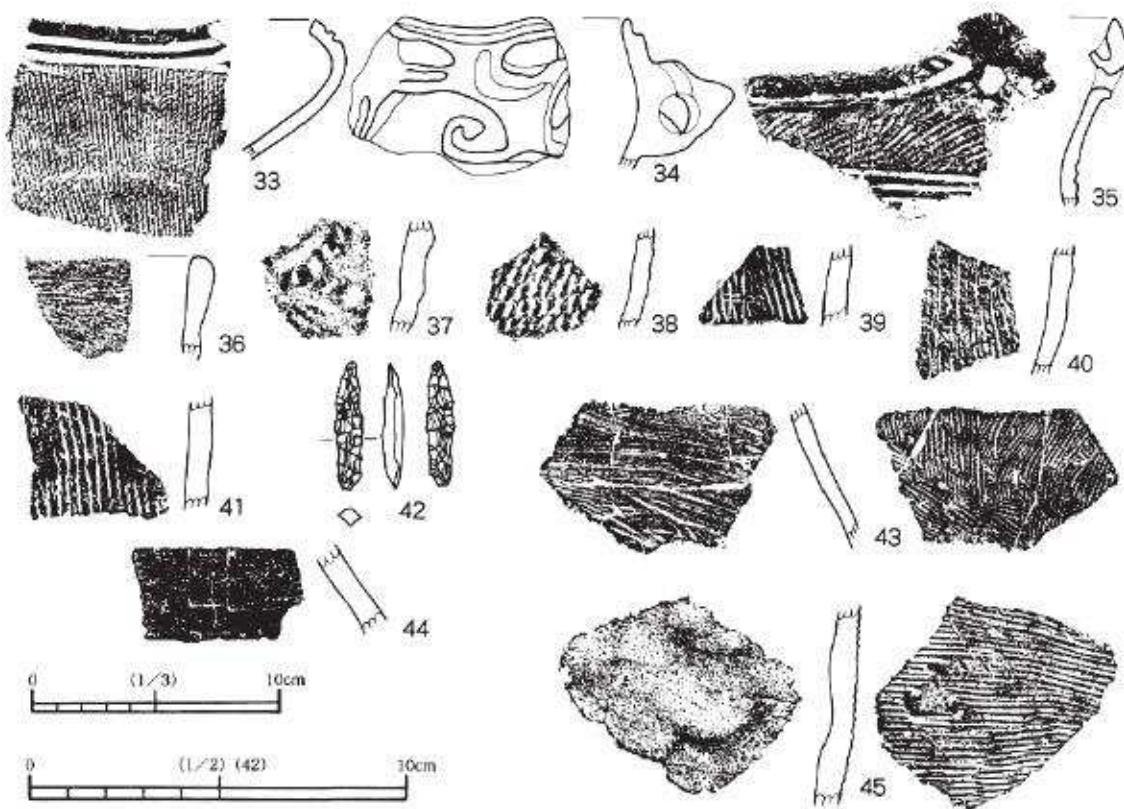
1-f類（10,11） やや幅狭の半隆起線文を多条に施し、ゆるく外反する口縁部を本類とした。11は磨滅のため明確ではないが、いずれも縄文地上に半隆起線文、連続爪形文が施文される。10は薄手の作りで最大厚は0.8cmを測る。胎土に金雲母を含み、焼成不良で黒褐色を呈する。11は口唇部に突起を有し、頸部下に3～4条の半隆起線文を区切る形で「し」の字形の貼付突起がある。

1-g類（12） 4単位の大波状口縁を呈し、連続爪形文と半隆起線文が口縁に平行して施文される。半隆



第10図 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

0 (1/3) 10cm

第11図 出土遺物実測図 ($S = 1/2, S = 1/3$)

起線文で区画された中は縄文地を残し、その下部に再び、連続爪形文と半隆起線文が配される。口縁端部は折り返し状を呈する。口唇直下の爪形文は、施文深度が浅く、間隔も狭い。逆に頸部の爪形文は施文深度が深い。焼成不良で、胎土に金雲母を含む。

1-h類 (13) 口縁部に2条の横走する半隆起線文を施した下部に、1条の連続爪形文を配するものである。口縁端部はやや内ソギ状を呈す。口径は26.0cmを測る。焼成良好で、明黄褐色を呈する。

1-i類 (14) 口縁部に4条の半隆起線を施し、頸部は無文帶を作出する。半隆起線上に爪形文は施さない。口径23.0cmを測る。明橙色を呈する。

2類 (15~20) 頸部資料を本類とした。

2-a類 (15~17) 半隆起線文と連続爪形文を有するものを本類とした。15・17は直立、16はやくびれて立ち上がる。17は2条にわたって施文深度が浅く、弱い連続爪形文が施される。口縁部の可能性もある。15は外面に二次焼成を受けている。また、胎土に微量ながら金雲母が含まれている。16は明橙色を呈する。

2-b類 (18~20) 縦位に棒状の粘土帯が貼付されているものを本類とした。19は胎土、色調などから9と同一個体の可能性がある。18、19ともに胎土に微量ながら金雲母を含む。20は縄文地上を半隆起線文で区画し、その間に棒状の粘土帯を貼付する。また、粘土帯下部にはボタン状の粘土帯が貼付されている。

3類 (21~31) 胴部資料を本類とした。

3-a類 (21~23) 半隆起線による区画内に格子目文を施すものを本類とした。21は明橙色を呈し、胎土に金雲母を多量に混入する。23は径0.7cmの円形孔が見られ、補修孔と考えられる。

3-b類 (24~29) 縄文地上に縦位の集合沈線を垂下せるものを本類とした。本書に掲載していない資料の中でも多く認められる類である。26、27は同一個体の可能性がある。25は内面に二次焼成を受けている。

3-c類(30、31)縄文地上に半隆起線文を縦位に施すものを本類とした。30は底部に近い部位で、器厚は1.5cm、底部付近径19.5cmを測る。また、一部にB字状文の施文が見られる。施文深度が他の土器に比べ深く、竹管以外の工具で施文されている可能性がある。明黄褐色を呈し、内面に二次焼成を受けている。31は胎土に微量の金雲母と多量の砂粒を含んでいる。

4類(32) 底部資料である。

底径7.7cmを測り、網代痕を残す。胴部には斜行縄文が施されている。明橙色を呈する。土器の胎土・色調などから本群に含めた。

第II群(第11図33、34・図版6) 本群は縄文中期中葉に属するものである。

33は口縁が「く」の字状に屈折する浅鉢である。口縁に平行して沈線が施文され、以下燃糸文を有する。内面黒褐色を呈し、丁寧に磨かれている。胎土に0.5cm大の礫を含む。

34は口縁部に把手が付される深鉢である。口縁部はやや内湾し、把手は横方向に展開する。隆帯を貼り付け、その上に沈線を施す。灰褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。

本群はその文様の特徴などから、大木8a式期に対比される。

第III群(第11図35~41・図版6) 本群は縄文後期初頭~前葉に属するものである。

35はゆるやかに開き小波状を呈する口縁部破片である。口唇部に刻目を施し、幅太の沈線をその下部に平行させ口縁部区画内に縄文を充填する。頸部には沈線束を巡らし、胴部文様帶と区別する。内外面とも、炭化物が多量に付着している。焼成良好で、内面は丁寧に磨かれている。36は直立ないしは外反する口縁部片で、不規則な条線文が横位に施されている。外面の一部に炭化物が付着し、胎土に砂粒を多量に含む。37は深鉢の頸部片で、刺突のある突帯がめぐる。38~41は深鉢胴部片で、38は刺突文を施し、39~41は燃糸文が施される。41の外面には炭化物が付着している。

本群は三十稻場式~南三十稻場式に対比される。

2. 石 器 (第11図42、図版6)

基部を若干欠損するが、現在長3.4cm・幅0.8cm・厚さ0.6cmを測る尖基の棒状石錐である(石錐の可能性もある)。断面は菱形を呈する。石質は頁岩である。その形態的特徴から、本遺跡では第III群土器に伴うものと考えられる。

3. 土 師 器 (第11図43、図版6)

甕あるいは壺形土器の肩部破片と思われる。調整は、外面ヨコハケ・タテハケ、内面はヨコハケが見られる。輪積み痕をとどめる。焼成は良好で、外面に二次焼成を受ける。詳細な時期は不明だが、細かいハケの特徴などから、弥生土器~古式土師器の可能性がある。

4. 中世陶器 (第11図44~45、図版6)

44は、越前焼甕の肩部片で、外面に磨滅してはっきりしないが格子文の押印が捺されている。外面は暗赤褐色、内面は黒褐色を呈する。年代はおおむね14~15世紀に属すると思われる。45は珠洲焼甕の体部片である。内面には梢円形の押圧痕、外面には斜位方向で、やや幅太のしっかりしたタタキ目が見られる。また、外面には自然釉がかかっている。タタキ目などの特徴から吉岡編年IV期(吉岡1989)の所産と考えられる。

註

- (1)『加茂市史』上巻P49図版1収録の番号2と番号17の資料については所在不明、図版1の番号7、P50図版2の番号22と番号29の資料については再録していない。

第V章 自然科学分析

縄文時代中期の植物遺体の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

加茂市役所遺跡は、加茂川が丘陵地から信濃川右岸の沖積平野に流れ出た付近に位置する。本遺跡は、昭和30年に行われた市役所本館建築の際にその存在が明らかとなり、縄文土器や植物遺体等が採取された。また、今回行われた発掘調査では、地表下3~4mの青灰色砂質土中から縄文時代中期前半の遺物と共に植物遺体が検出された。

本報告では、昭和30年と今回の発掘で出土した植物遺体（木材・種実）の種類を明らかにし、当該期の古植生について検討する。

2. 樹種同定（図版5・7・8）

（1）試 料

試料は、青灰色砂質土（第Ⅳ層）中から出土した流木3点（自然木No.1, 自然木No.2, 自然木片タッパー②）、昭和30年に出土した炭化材（昭和30年出土炭化材）および種実試料（昭和30年出土植物種子類）中に入っていた炭化材である。

（2）方 法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

炭化材は、木口・柾目・板目の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）を用いて木材組織を観察し、種類を同定する。

（3）結 果

樹種同定結果を第3表に示す。昭和30年出土植物種子類中の炭化材には、2種類が認められたため、a,bに分けて表記した。出土した木材試料には、ヤナギ属・クリ・ヤマグワ・サクラ属の4種類が認められた。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ヤナギ属 (*Salix* sp.) ヤナギ科

散孔材で、大型の道管が年輪全体にほぼ一様に分布する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。木材組織の形態から、試料は根材と考えられる。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔隙部は1~4列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單

3. 種実同定

穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圈部は1~5列、晚材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II

~III型、1~6細胞幅、1~50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・サクラ属 (*Prunus* sp.) バラ科

散孔材で、道管は単独または2~8個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~3細胞幅、1~30細胞高。木材組織の形態から、サクラ属の中でも落葉性のサクラ亜属やウワミズザクラ亜属と考えられる。

第3表 樹種同定結果

試料名	時代	樹種名
昭和30年出土炭化材	縄文時代中期前半	クリ
昭和30年出土植物種子類中の炭化材	縄文時代中期前半	a: ヤマグワ
		b: サクラ属
自然木No.1	縄文時代中期前半	ヤマグワ
自然木No.2	縄文時代中期前半	クリ
自然木片タッパー②	縄文時代中期前半	ヤナギ属(根材)

3. 種実同定 (図版9)

(1) 試 料

試料は、昭和30年に検出された試料（昭和30年出土植物種子類）と、今回の発掘調査で出土した試料（タッパー①）の2点である。

(2) 方 法

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定する。

(3) 結 果

同定された種実遺体の種類ならびに特徴について以下に示す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核が5個検出された。褐灰色。大きさは3cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。

・ブナ (*Fagus crenata* Blume) ブナ科ブナ属

殻斗ならびに果実が13個検出された。殻斗は乾燥により4つに裂開し、大きさ2cm程度。背面には多数の総苞片が突起状に並ぶ。果実は3陵形で大きさ1cm程度。表面が乾燥により劣化する。

・コブシ (*Magnolia kobus* DC.) モクレン科モクレン属

種子が1個検出された。横に広い心形で大きさは8mm程度。種皮は厚く堅い。下端に大きなまるい「へそ」がある。腹面の中心に大きなくぼみがある。背面には浅い筋が存在する。

・ホウノキ (*Magnolia obovata* Thunb.) モクレン科モクレン属

種子が1個検出された。偏平で大きさは8mm程度。種皮は厚く堅い。下端からすこし腹面よりにずれたところに大きなまるい「へそ」がある。腹面の中心に大きなくぼみがある。背面には比較的深い筋が存在する。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume.) トチノキ科トチノキ属

種皮および果実が38個検出された。いびつな球形で、大きさは3cm程度。種皮は薄く堅い。表面は黒色、平滑で光沢のある部分と、黒褐色でざらつく部分がある。果実として検出されるのはすべて幼果である。また、成熟したものの果皮もいくつか存在する。果皮は3裂し、表面はざらつく。肉厚で弾力がある。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科エゴノキ属

核が11個検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。大きさは15mm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

4. 考 察

検出された種実は、いずれも完形に近く、表面が磨耗していることから、周囲から流されて堆積したものとみられる。このことから、周囲にこれらの植物が生育していたことが推定される。植物遺体のうち、材で確認されたクリと、種実で確認されたブナ・オニグルミ・トチノキは、古くから食用として利用されていた種類であり、各地の縄文時代の遺跡から多くの検出例がある。本地域においても、これらの種実が食用とされていた可能性がある。また、材のみ検出されたクリについても、これまでの報告例等を考慮すれば、種実を食用としていた可能性が高い。これらのうち、トチノキは食用に際して「あくぬき」が必要となるが、この技術は縄文時代中期以降に一般化したといわれている（渡辺、1984）。またクリの材は、縄文時代の住居構築材や燃料材に多数確認され（千野、1983,1991；高橋・植木、1994）、特に関東地方・北陸地方・東北地方で顕著である。このことから、本地域においても縄文時代にクリが様々な用途に用いられていたと推定される。

遺跡を囲む周辺植生との関係をみると、今回の調査で確認された種類は、後背山地（加茂山公園）の植物相（加茂地区理科教育センター、1985）とほぼ一致するが、ブナやトチノキが見られないなどの違いもある。ブナは冷温帯極相林の代表的な種類であるが、現在加茂山周辺は人為的影響による代償植生が発達していることから（宮脇・奥田、1985）、ブナはみられない。しかし、加茂山周辺の潜在自然植生（人為的影響などが加わらない自然な状態を仮定した場合の植生）はブナ林になるといわれている（宮脇ほか、1985）。今回の結果から見ると、縄文時代の後背山地（加茂山など）にはブナやトチノキなどが生育していたことが考えられ、後背山地には過度の人為的影響が及んでいなかったことが示唆される。

〈引用文献〉

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生－南関東地方を中心にして－.
東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, p.27 - 42.
- 千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物性遺物からの検討－.
東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p.215 - 249.
- 加茂地区理科教育センター（1985）加茂山の植物目録、「加茂山の植物」, p.258 - 275, 加茂市教育委員会.
- 宮脇 昭・奥田重俊（1985）中部地方の現存植生図. 宮脇 昭編「日本植生誌 中部」, 至文堂.
- 宮脇 昭・藤原一絵・中村幸人・大野啓一・村上雄秀・佐々木 車（1985）中部地方の潜在自然植生図.
宮脇 昭編「日本植生誌 中部」, 至文堂.
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PARYNO, 2, p.5 - 18.
- 渡辺 誠（1984）縄文時代の植物食. p.247, 雄山閣

第VI章 まとめ

1. 第I群土器（縄文中期前葉）について

本遺跡から、最も多量に出土している土器は第I群土器で、縄文中期前葉に比定される。新潟県における縄文中期前葉の様相は、いわゆる新保・新崎式土器様式と呼称される北陸系土器群が佐渡を含めた海岸・平野部を中心に展開し、それに東北系・中部高地系土器群が加わることが明らかにされている（寺崎1989）。また、該期を含む中期土器編年は、本遺跡が所在する行政区域（中越地方）の土器を中心に組み立てられ、その研究史を総括した業績も発表され（富樫・佐藤1985）、資料も比較的豊富である。ここでは、その後北陸地方（主に石川県）で組み立てられた編年（加藤1988など）に依拠しつつ、新潟県でもいくつか発表された編年案に照らし、第I群土器の編年的位置づけについて考察してみたい。

最初に第I群土器の総体的な特徴を概観する。器種はすべて深鉢である。器形は全体を窺えるものはないが、円筒状を呈すると考えられる。口縁部の形態は、平口縁が主で、小突起のつくもの、波状口縁を呈するものが少數ながら存在する。口縁部および頸部に半截竹管による半隆起線文、連続爪形文を施文することを特徴とし、本時期に見られる蓮華文は欠落する。口縁部に無文帯を残すもの、縄文を施文するもの両者とも認められる。胴部文様は格子目文なども見られるが、縄文地上に縦位の沈線を垂下させたものが多い。木目状撚糸文などは認められない。胎土に金雲母を含む個体が散見される。異系統の土器は存在しない。

以下、上記の特徴を踏まえ卷町大沢遺跡（前山1990）や見附市山崎A遺跡（金子ほか1991）で層位的に確認された土器群をもとに作成された該期の編年案に対比させてみたい。

まず、卷町大沢遺跡では、前期最終末～中期前葉新段階をI～III期土器群に分類し、III期を新崎式に対比させ、新旧に二分できる可能性を示している。IIIa期は蓮華文や無文帯内模状刻目文の欠落、連続爪形文の施文などを特徴とするとされ、本遺跡第I群土器と類似した様相が窺える。見附市山崎A遺跡では、該期を1～7期に区分し、各地域の編年と対応させた編年表を提示された。本遺跡第I群土器は、胴部への木目状撚糸文や羽状縄文施文の消滅、半隆起線の多条化、爪形文が普遍的に観察されるなどを指標とした第4期に対応できる。第4期の基準資料のひとつとして田上町古屋敷遺跡（中島ほか1976）が挙げられているが、報告の中で時間的差異を持つとされ分類された、古屋敷A・古屋敷Bのうち、古屋敷Bに分類された土器群と様相をほぼ同じくする（田上町古屋敷遺跡の土器は、実見した範囲では黄橙色を呈し、焼成良好なものが多い。本遺跡との様相差に注意しておきたい）。

以上から、詳細な発掘調査の結果、検出された資料ではなく、資料数も少ないが、本遺跡第I群土器は卷町大沢遺跡IIIa期・見附市山崎A遺跡第4期に対比され、新保・新崎式土器第IV様式（加藤1988）に含まれる一時期を形成した土器群と考えられる。

2. 遺跡の性格について

本遺跡における全体調査面積は、今回の発掘調査面積約50m²、昭和30年調査面積約110m²あわせて160m²にすぎず、また、十分な調査であったとは言いがたい面もあることから、遺跡の性格について論ずるには、はなはだ情報不足である。ここでは限られた情報からではあるが、将来の発掘調査の一視点となるよう、予察の意味もこめて今後の課題を提示し、まとめとしたい。

昭和30年に現地指導を行った中村孝三郎氏は、『根立遺跡』（中村1975）のなかで、本遺跡の状況について「北側の創壁4.5mの深い地点に、幅6～7mくらいにわたって、古い時代の生活痕跡をしめす生なましい

包含遺物のレンズ状を呈した層土の断面が、鮮かに掘り出されていたことであり、その中には炉址とみられる焼土、焼石、細かい木炭粒、かなりの縄文中期初頭の爪形文土器を主点とした千石原式から馬高式にわたる土器片々が狭在していた」と記されている。その中の「レンズ状を呈した層土の断面」、「炉址とみられる焼土、焼石、細かい木炭粒」が何らかの住居痕跡だったとすればある一定期間、本地点に居を構え、活動を行っていたことが想定されよう。

しかし、今回と以前の調査においても、現地表下約4mの暗黒色土層から土器を中心として、植物種子、炭化材などが出でているが、明確な遺構は検出されていない。また、石器などの遺物も本遺跡の主体時期である縄文中期前葉に限っても皆無である。このような遺物の出土状況と遺跡が丘陵縁辺の裾部に位置し、谷すじ沿いの低湿地に近接して立地していたと想定され、居住施設を築くには適さない環境下にあったと見られることなどから、明確な居住痕跡をとどめているとは考えにくい。むしろ、居住地とは別種の機能を有した遺跡と考えるほうが妥当と思われる。

いずれにしても、本遺跡の後背地には加茂山、約200m先の眼前には加茂川が存在し、その加茂山には約500種近い植物が確認され、各地の縄文時代の遺跡から食料残滓として検出される種類も多数生息している（加茂市教育委員会ほか1985）。残念ながら、本遺跡出土の植物遺体は詳細な出土状況が不明であり、種実は自然科学分析結果では周囲から流されて堆積したと見られることなどから、縄文人の植物採集活動を示す、積極的な根拠は見出せない。しかし、本遺跡後背に存在する加茂山に対する採集活動が行われていたことを想定することは容易であろう。本遺跡は周囲の自然環境を有効に利用する一環として、湿潤地に位置した一遺跡と考えておきたい。

さらに、本遺跡の性格について考える際に本遺跡周辺に存在する同時期の遺跡との関係を無視することはできない。詳細な時期は不明であるが、本遺跡から南東約150mに位置する遊覧場遺跡（第6図8）が住居設営可能と考えられる地質構造の安定した台地に存在しており、本遺跡との関連性を無視できない遺跡である。その他の加茂山地内あるいは周辺における縄文期の遺跡は希薄な分布状況を示し、本遺跡と有機的関係を持つ遺跡は見い出し難い。しかし、地形上から居住域として利用可能なところはあり、今後、加茂山地内および周辺地域での縄文期の遺跡発見が大きな課題となろう。本遺跡の範囲は確認されていないが、特に、本遺跡から緩傾斜で上った青海神社境内地内の縄文期の遺物発見に留意したい。また、信濃川の支流である加茂川流域沿いでは、本遺跡から南東約6kmの台地上に位置する松ヶ沢遺跡（第6図26）で中期前葉期の土器が採取されているのみであり、現段階では該期の遺跡は希薄である。むしろ、第7図に示した東山丘陵西側縁辺部沿い域に該期の遺跡が多く確認されていることから、やや広い範囲で諸様相を検討する必要もあるであろう。

縄文中期前葉のうち、中期中葉、後期前葉と断続的に土器が見られ、各期に何らかの土地利用があったことが窺える。後期前葉以降長期の空白があり、古代・中世の遺物が散見される。発掘調査以前にかなり掘削されていたことから、古代・中世期の遺跡の在り方は全く不明であったが、該期の遺物は微量であることや弘化3年（1846）に描かれた青海神社境内絵図によれば、本遺跡地一帯は池になっていたこと（関1983）などから、遺構が存在する可能性は低い。古代・中世期の遺物は、自然營力により本遺跡南方上部に位置する青海神社遺跡から流入したものと考えられる。

以上、僅かばかりの資料から思いつくまま述べてきたが、本遺跡は、発掘調査面積が極めて小さく、遺跡の規模、内容などほとんどが不明である。しかしながら、加茂市にとって、本遺跡は学史的にも古くから研究者の注目を浴び、立地条件からも豊富な遺物を包含することが想定され、重要な遺跡と考えられる。現在本遺跡地内一帯は道路建設や宅地化が進み当面は緊急の発掘調査が行われることはないであろうが、しかるべきときは、しっかりとした体制で発掘調査を行い、詳細が把握されることを期待したい。

最後に、寺崎裕助氏、前山精明氏、八百枝茂氏をはじめ多くの方々からご教示を賜りましたが、十分にまとめきれなかった。改めて御礼申し上げるとともに、筆者の非力をお詫びいたします。

引用・参考文献

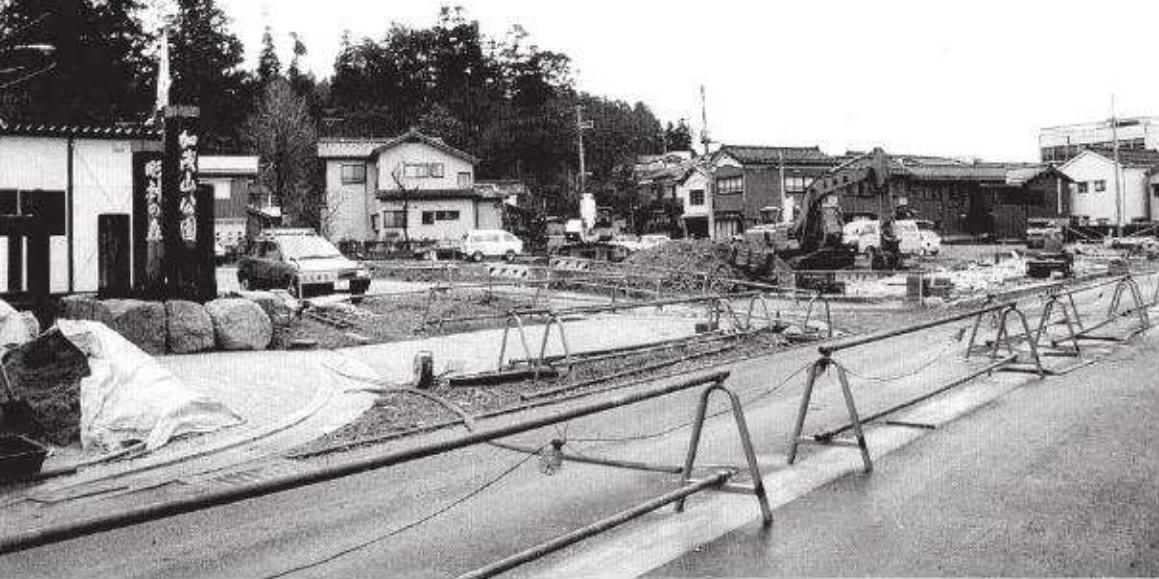
- 江坂輝彌ほか 1962 「上野遺跡」 津南町教育委員会
大橋信彦 1991 「石塚遺跡」 栄町教育委員会
加藤三千雄 1988 「新保・新崎式土器様式」 『縄文土器大観』3中期Ⅱ 小学館
金子拓男・寺崎裕助ほか 1982 「羽黒遺跡」 見附市教育委員会
金子拓男 1986 「第5節 中期の文化、1 中期前葉の様相」 『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
金子拓男・佐藤雅一・安藤正美ほか 1991 「山崎A遺跡発掘調査報告書」 見附市教育委員会
金子正典・田村浩司 1994 「綾ノ前・菖蒲沢遺跡」 三条市教育委員会
加茂市教育委員会・加茂地区理科教育センター 1985 「加茂山の植物」 加茂市教育委員会
川上貞雄ほか 1987 「東部地区遺跡詳細分布調査報告書」 加茂市教育委員会
北村 亮・高橋 保ほか 1990 「新潟県埋蔵文化財調査報告第56集 岩原I遺跡 上林塚遺跡」 新潟県教育委員会
國島 聰 1994 「安出遺跡発掘調査報告書」 村松町教育委員会
小須戸町 1983 「小須戸町史」
小林達雄・青木 豊 1983 「長者ヶ平遺跡」 Ⅲ 小木町教育委員会
粉川昭平 1983 「縄文人の主な植物食糧」 『縄文文化の研究』2生業 雄山閣
坂井秀弥 1994 「加茂市青海神社遺跡の土器」 『新潟考古学談話会会報』第14号 新潟考古学談話会
三条市 1981 「三条市史」資料編第1巻 考古・文化
三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974 「吉野屋遺跡」 新潟県三条商業高等学校社会科
三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1980 「五十嵐川流域における先史遺跡」 vol.2
新潟県三条商業高等学校社会科
関 正平 1983 「青海郷の総鎮守 青海神社」 『図解にいがた歴史散歩』 三条・燕・加茂 新潟日報事業社
高橋 保・高橋保雄ほか 1990 「新潟県埋蔵文化財調査報告第55集 清水上遺跡」 新潟県教育委員会
田上町 1994 「田上町史」通史編
田畠 弘 1993 「保明浦遺跡」 田上町教育委員会
辻 秀子 1983 「可食植物の概観」 『縄文文化の研究』2生業 雄山閣
寺崎裕助 1988 「新潟県長者ヶ原遺跡出土の縄文土器」 『新潟考古学談話会会報』第2号 新潟考古学談話会
寺崎裕助 1989 「縄文中期の概要」 『縄文中期の諸問題』 群馬県考古学研究所 千曲川水系古代文化研究所
新潟県考古学談話会 北武藏古代文化研究会
寺崎裕助 1994 「新潟県における縄文時代の拠点的集落跡－中期を中心にして－」
『新潟考古学談話会会報』第14号 新潟考古学談話会
寺崎裕助 1995 「新潟県における中期初頭の土器－関東・中部高地系土器を中心として－」「中期初頭の諸様相」
縄文セミナーの会
富樫雅彦・佐藤雅一 1985 「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相について（上）」
『三条考古学研究会機関誌』第3号 三条考古学研究会
中島栄一ほか 1976 「古屋敷遺跡」 田上町教育委員会
中島栄一 1986 「第6節 後期の文化」 『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
中村孝三郎ほか 1972 「嵐北」 新潟県教育委員会
中村孝三郎 1973 「千石原遺跡」 長岡市立科学博物館
中村孝三郎 1975 「根立遺跡」 長岡市立科学博物館
新潟県教育委員会 1980 「新潟県遺跡地図」
新津市 1990 「新津市史」資料編第1巻 原始・古代・中世
新津市 1993 「新津市史」通史編・上巻
新津市教育委員会 1993 「草水町2丁目窯跡現地説明会資料」
秦 繁治・寺崎裕助ほか 1990 「十二平遺跡発掘調査報告書」 能生町教育委員会
藤巻正信・國島 聰ほか 1991 「新潟県埋蔵文化財調査報告第29集 城之腰遺跡」 新潟県教育委員会
本間信昭・戸根与八郎 1975 「上越新幹線－埋蔵文化財発掘調査報告書第4 長畠遺跡」 新潟県教育委員会
前山精明 1990 「大沢遺跡」 卷町教育委員会
増子正三 1990 「安田町山谷遺跡出土の縄文時代中期の土器」 『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
水澤幸一 1994 「江上館跡II」 中条町教育委員会
村 松 町 1980 「村松町史」資料編第1巻
八百枝 茂 1975 「第2節 縄文時代の遺跡」 『加茂市史』上巻 加茂市
山田芳和 1986 「9 第9群土器 新崎式期」 『真脇遺跡』 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘 調査団
吉井雅勇 1994 「古谷地B遺跡・寺田遺跡・赤井遺跡」 荒川町教育委員会
吉岡康暢 1989 「総論 珠洲古陶」 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
吉岡康暢・水野九右衛門 1976 「越前・珠洲」 中央公論社
和田寿久ほか 1990 「下ゾリ遺跡」 朝日村教育委員会

写 真 図 版

加茂市役所遺跡周辺の空中写真 (S = 約 1/16,000) 米軍 1947 年撮影



図版2



1. 遺跡近景
(北東から)



2. 遺跡近景
(北から)



3. 遺跡近景
(南東から)



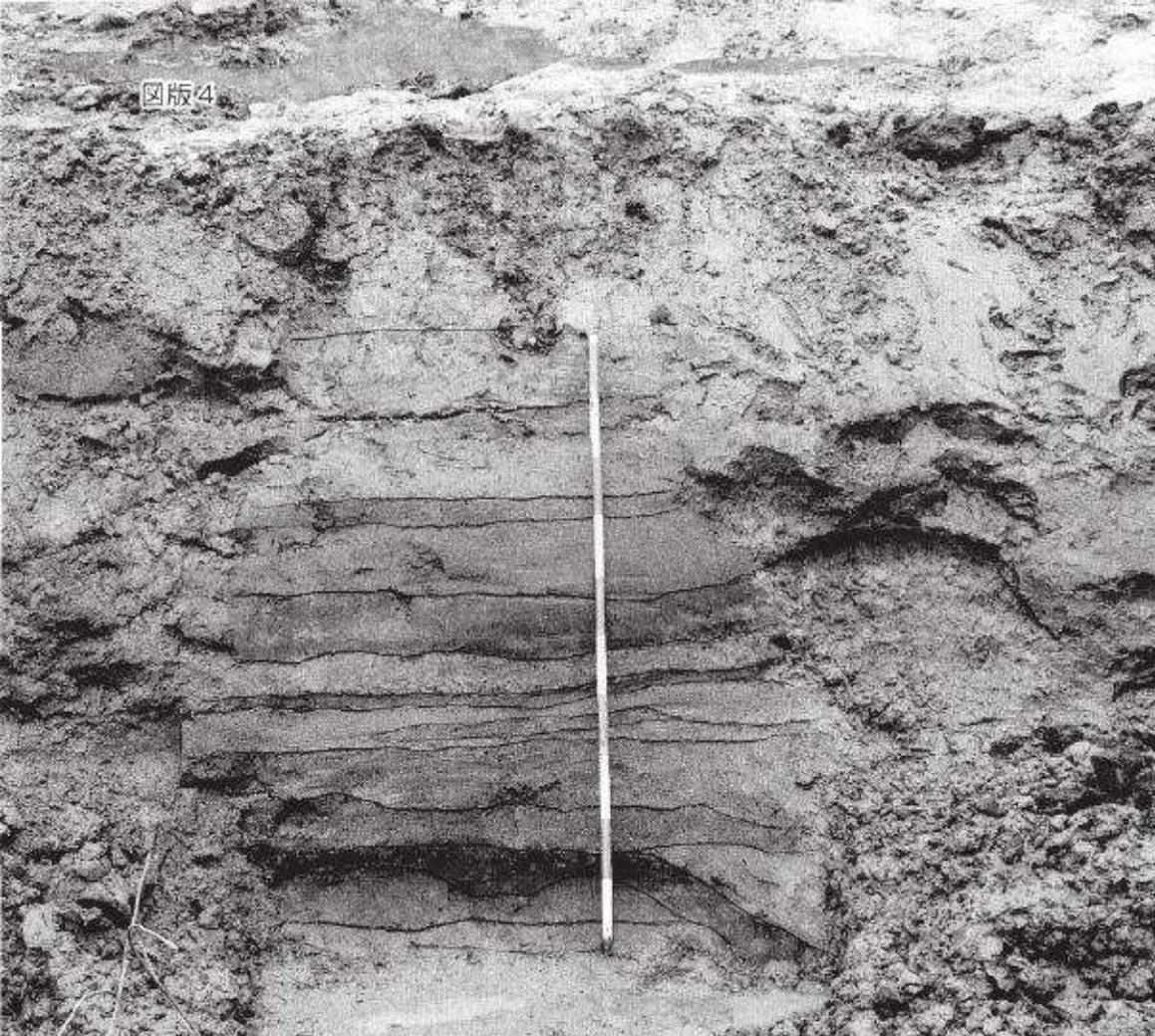
1. 発掘調査風景



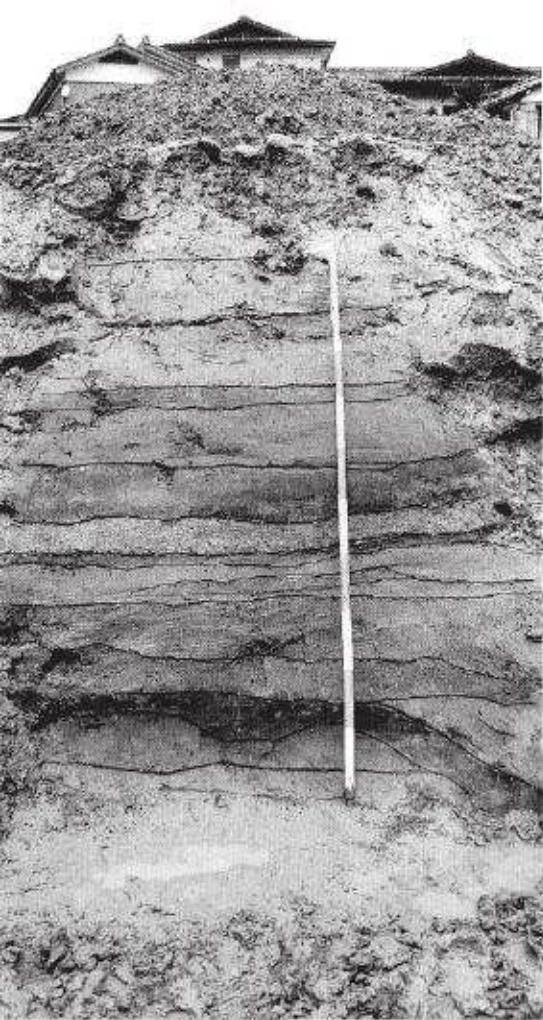
2. 発掘調査風景



3. 発掘調査風景



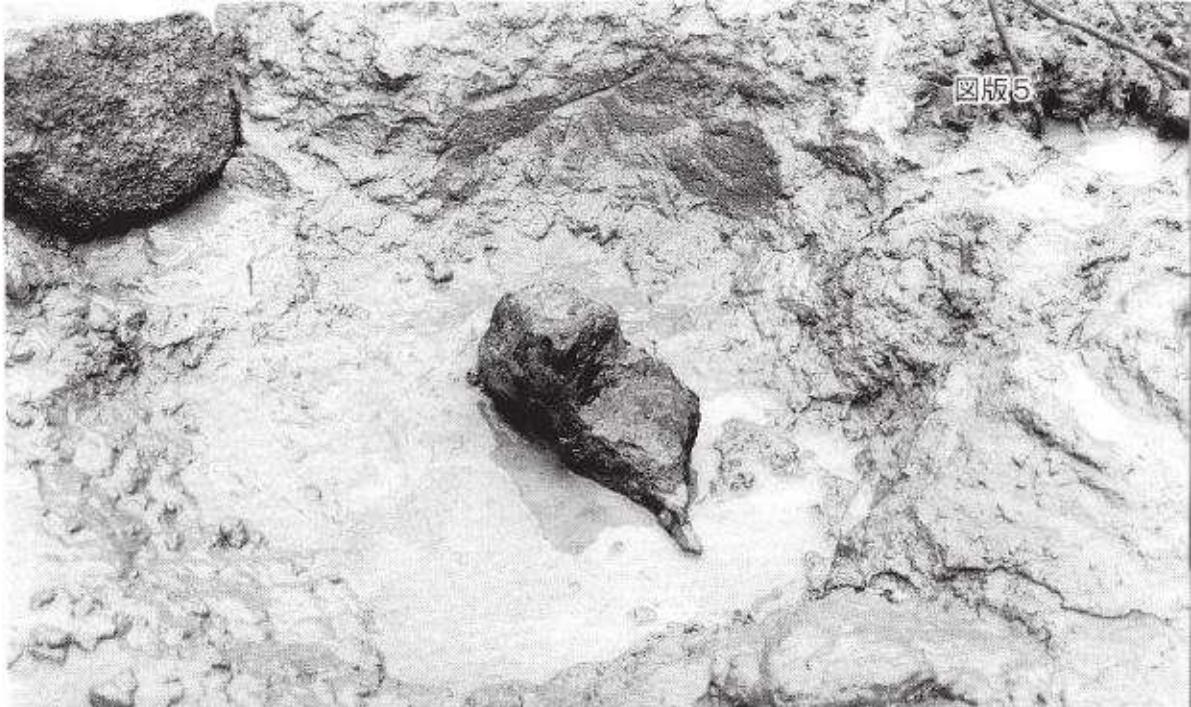
1. 調査区北壁
土層断面（南から）



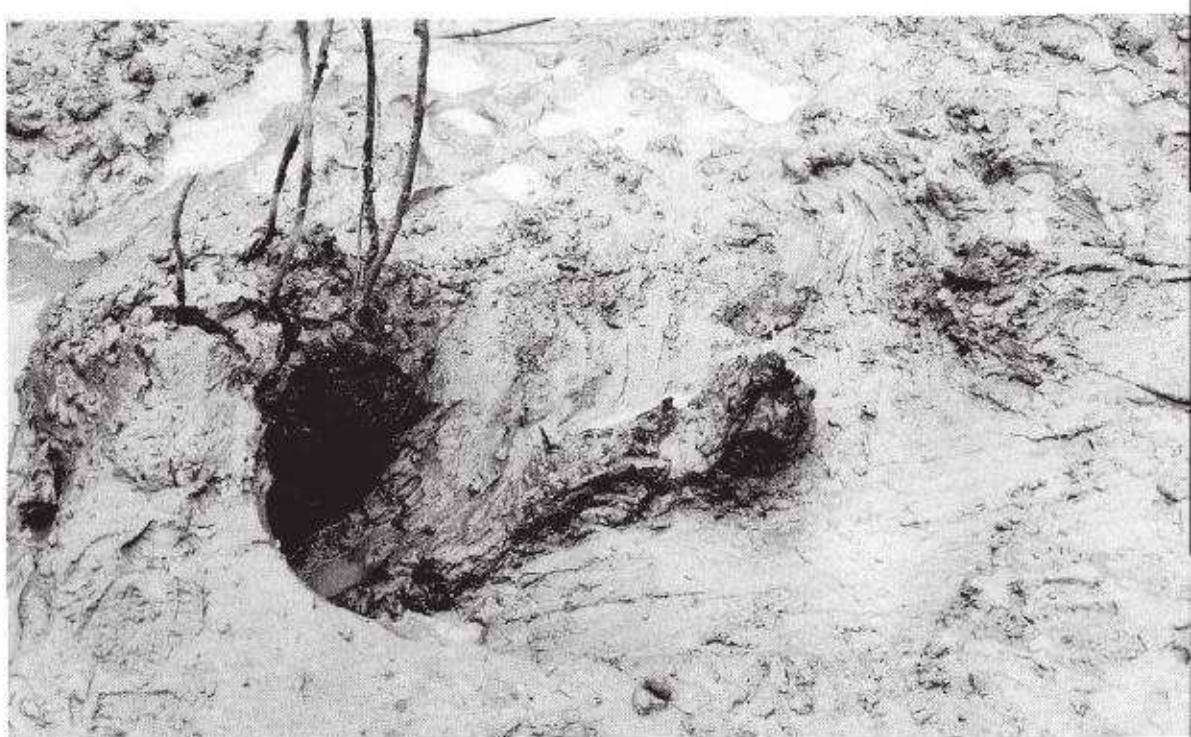
2. (左) 調査区北壁
土層断面（南から）



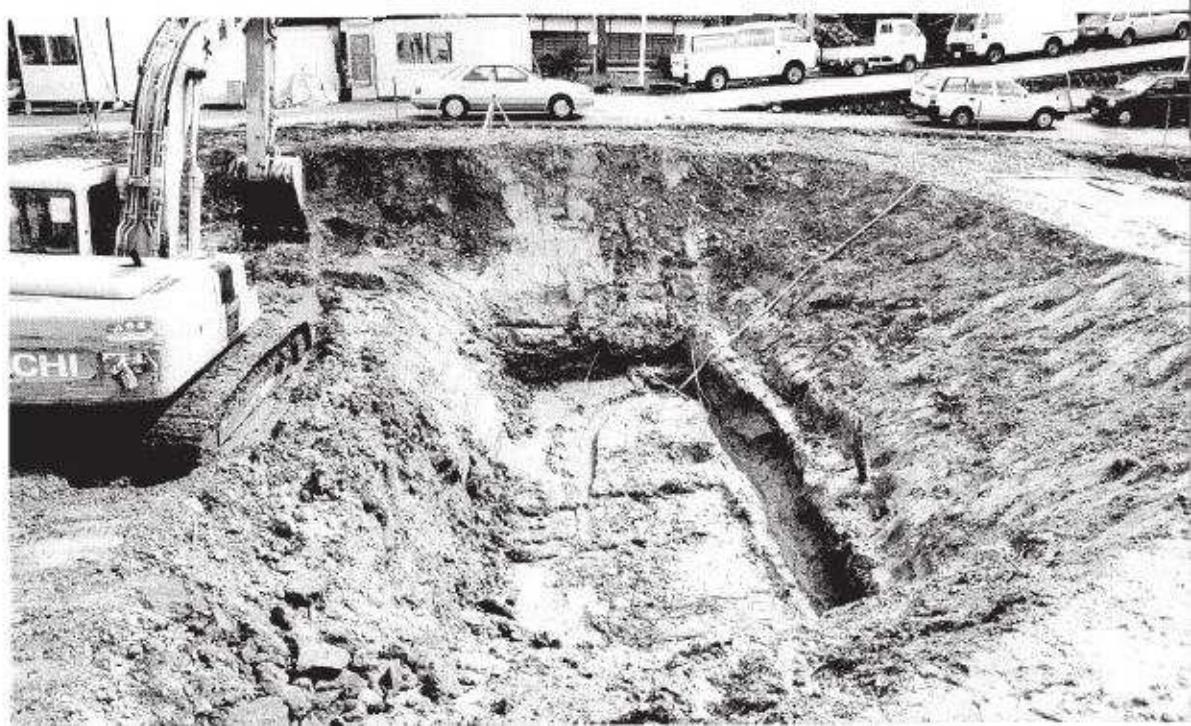
3. (右) 調査区西壁
土層断面（東から）



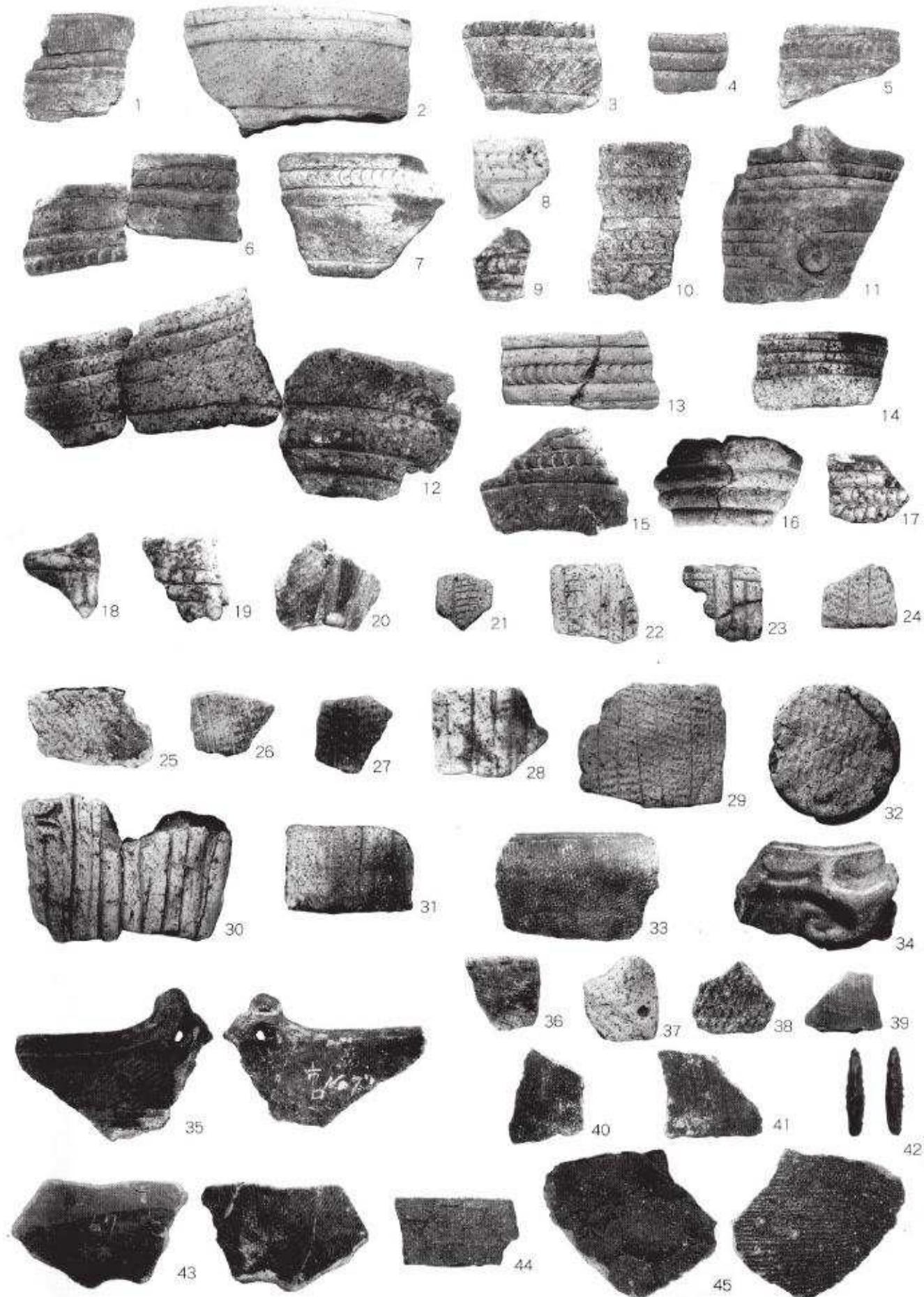
1. 自然木No.1
出土状況（西から）



2. 自然木No.2
出土状況（東から）

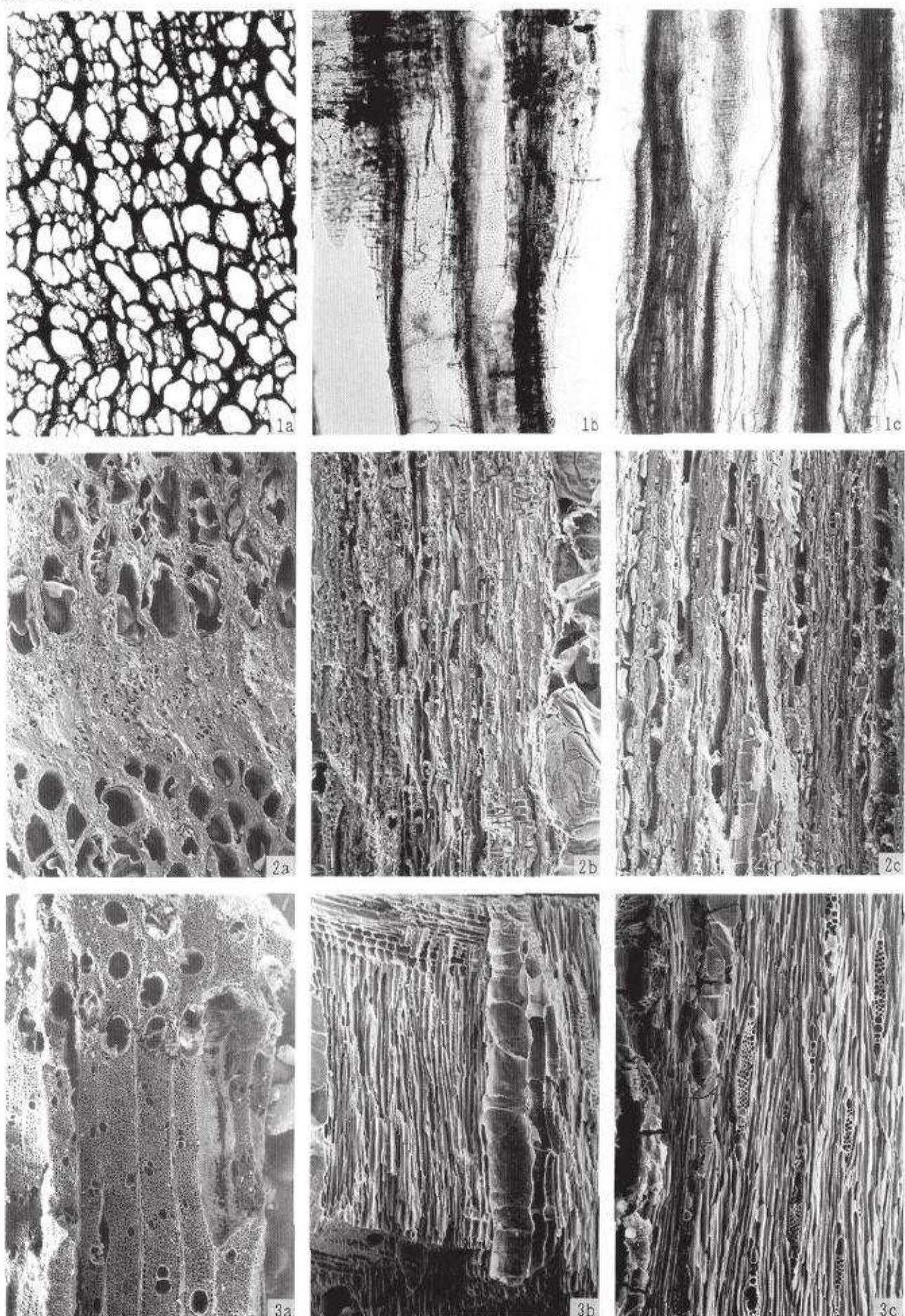


3. 調査区完掘状況
(西から)



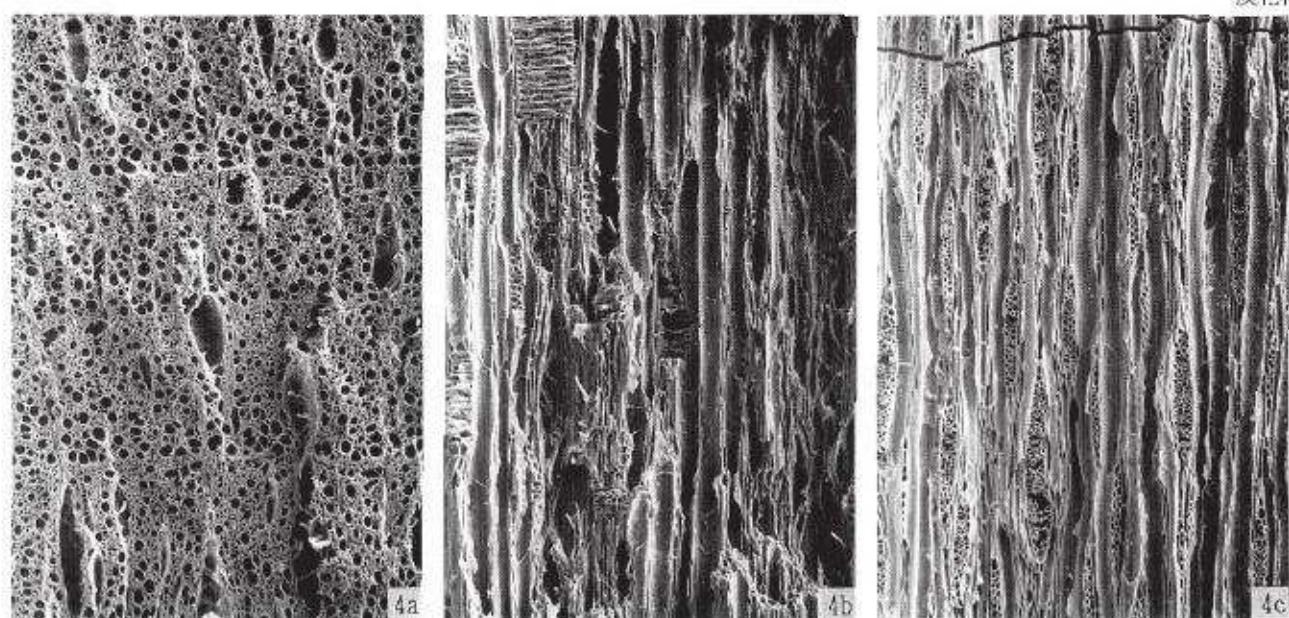
42 S = 1/2
その他 S = 1/3

木材・炭化材



1. ヤナギ属（自然木片タッパー②）
 2. クリ（昭和30年出土炭化材）
 3. ヤマグワ（昭和30年出土植物種子類中の炭化材）
- a : 木口, b : 横目, c : 板目

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b,c

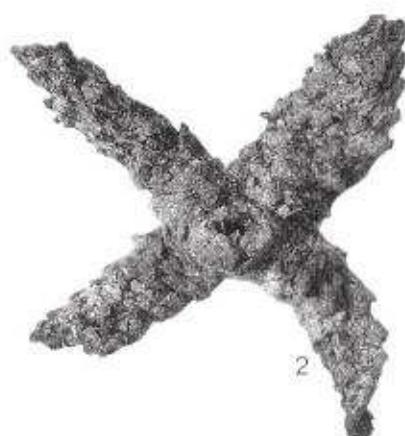


4. サクラ属(昭和30年出土植物種子類中の炭化材)

a:木口, b:粙目, c:板目

200 μm : a
200 μm : b,c

種実



1. オニグルミ
3. ブナ (果実)
5. ホウノキ
7. トチノキ (種子)

2. ブナ (殻斗)
4. コブシ
6. トチノキ (果実)
8. エゴノキ属

1cm
(1,6,7)

4mm
(2 - 5, 8)

報告書抄録

ふりがな	かもしやくしょいせき							
書名	加茂市役所遺跡							
副書名	旧加茂市役所庁舎解体撤去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻欠								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告(5)							
編著者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会							
所在地	〒959-13 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 ☎ (0256) - 52 - 0080							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 經	調 査 期 間	調 査 面 積 m ²	調 査 原 因	
かもしやくしょいせき 加茂市役所遺跡	にいがたけんかもしまつさかちょう 新潟県加茂市松坂町 268番地	市町村 15209	遺跡番号 6	37度 39分 34秒	139度 3分 37秒	19940311 ~ 19940314	約50m ²	旧加茂市役所庁舎解体 撤去工事
ふりがな 所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記	事 項		
かもしやくしょいせき 加茂市役所遺跡	遺物包含地	縄文中・後期・ 中世	なし	縄文中・後期土器 植物遺体	縄文時代中期の所産と思われる植物遺体を検出			

発行日 平成7年3月31日

加茂市文化財調査報告(5)

加茂市役所遺跡発掘調査報告書

発行者 加茂市教育委員会
新潟県加茂市幸町2丁目3番5号
TEL 0256-52-0080

印刷所 株式会社小野塙印刷所
新潟県加茂市新町1丁目5番16号
TEL 0256-52-0056